アリスとハンナ

名無し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アリスとハンナ

【Ｎコード】
Ｎ４２０８Ｊ

【作者名】
名無し

【あらすじ】
内気なロシア人少女アリスと、中性願望のある日系米国人女性ハンナの話です。

プロローグと1話（前書き）

（ｈｔｔｐ：／／ｐｉｘｉｖ．ｂｌｏｇｉｍｇ．ｊｐ／ｄｏｅ７７４／ｉｍｇｓ／７／４／７４０４４２ｂ９．ｐｎｇ）←キャラ集合絵へのリンクです。参考までに。

プロローグと1話

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ

目が覚める。洗面する。お湯を沸かし、紅茶、秋摘みのダージリンを淹れて、ストレートで飲む。
シャワーを浴びる。着替える。軽い朝食をとる。歯を磨く。そして本を読んだり、ピアノを弾いたりする。
昼に再びシャワーを浴びてから、軽い昼食をとり　―　いや、食べてるのかどうかもよく分からないが　―
少なくとも紅茶は飲み、また読書に耽り、時たまピアノを弾く。
暗くなってきたところで、彼女の姉が仕事から帰ってくる。
顔立ちは整っていて美人だが、化粧はしていない。
「アリス」「疲れちゃったの？」うたたねしていた妹を優しく起こし、二人で向かい合い紅茶を飲む。
時間と金銭の余裕があれば、具のたくさん入ったボルシチなどを拵えるのだが、
あいにく今月はカツカツなので、カーシャと豆のシチといった質素な夕食で済ませる。
今日3回目のシャワーを浴びて、パジャマに着替える。そうして横になり、膝を抱え込むようにして、眠る。

＊

目を覚ます。洗面をする。コーヒー　―　ブラックで砂糖を入れない　―　を、淹れて飲む。
今日はバイトがあるので、着替えたのち、エプロン弁当その他必要なものを丈夫な鞄に詰め込んで、
勤め先のパン屋へ向かう。歩いて。

外はまだ薄暗い。野良猫が現れては消えていく。澄んだ空気が目覚め切っていない身体に心地良い。
人通りもなく、静かで、平和だ。
パン屋の仕事はレジの他に、クッキーやパイ、ケーキを作って売ったりする。
昔から料理をするのは好きだった。レシピは無いが、目分量で味を付け、色々なスパイスに凝ってみたり、
時には失敗し、レパートリーを増やしながら、少しずつ腕を上げていった。
ルーを使わないカレーも作れるし、ありあわせの食材でなかなか美味しいスープだって作れる。
けれど、家にはもう、誰も一緒に食べてくれる人は居なかった。

＊

I

よく晴れた秋の日だった。そんな日だったから、お姉ちゃんは、普段家から一歩も出ない私に、「一緒に買い物に行こうよ」と誘ってくれたのだ。
それなのに、歩き慣れていないせいで、人通りの多い所ではぐれてしまった。
周りは見知らぬ人ばかりで、見慣れない場所で、一人ぼっちだ。
もう、この国に来て五年になるのに。私はこの街の道一つさえ覚えていなかった。
しかも、私は英語がほとんど話せない。
私は泣きたくなった。心細い事や不安に対してではなく、
いつも優しくしてくれる姉に、迷惑をかけ心配させてしまっていることに。
などと、考え事をして歩いていたものだから、人にぶつかってし

まった。
あぁ、また人様に迷惑をかけてしまった！
私が厄介事を起こし迷惑をかける度に１ルーブル貯金していったら、一体パンがいくつ買えるのだろう？
…父さんはいつも、私が何かをすると、いや何もしなくとも、ウォトカに酔いながら、私を怒鳴りつけた。
お前のせいだ、とか。お前なんか生まれて来なけりゃ良かったんだ、とか…。
そんなふうに怒鳴られるのを待っていたのに、それどころかその人はすまなそうに何か言っている。
私に何か言っている。私に？すまなそうに？１５年間生きてきた中で初めて私は ― といっても、そんなに多くの人々と出会った訳でも無いけれど ― 私に申し訳なさそうな態度をとってくれる人間が存在する事を知った。そんな。悪いのはいつも、私のほうなのに。
謝ろうとしたけど、驚きと申し訳なさとで声が出ない。泣いていたかもしれない。
そんな私を見かねてか、その人は私の手を引いて屋内に連れ込んだ。
パン屋だった。レジの横にあったクッキーを一袋、私に渡して言った。
「これでも食べて、元気出して。ね？」
英語だったのだろうか？でも何故かその時は何と言っているのか、はっきりと伝わった。
クッキーをひとつ手に取り、少しの間それを眺めた。胡麻や木の実といったものは入っておらず、シンプルなバター色とチョコレート色の市松模様だった。
表面はざらっとしている。口に入れる。すると、紅茶の欲しくなるような味が、いっぱいに広がった。
そういえば昔、ロシアから合衆国へと向かう飛行機の中で、お姉

ちゃんがクッキーを買ってくれたけれど、
あれよりも優しく、柔らかい味がする。私は、もしかするとこれは、この人が作ったのではないかしら、と思った。
それを聞きたかったけれど、英語が分からなかった。
「ねぇ」その人が話しかけてくる。「ナマエ、分かる？」ナマエ…？ナマエって、何の事だろう。
「あたしのナマエ(Name)は、ハンナ。」「あなたは？」…もしかして、名前(Мя)の事かな。それなら分かる。
私の名前は、「アリスデス。ナマエハアリスデス。」

＞i８７００―８３０＜

お姉ちゃんは警察官で、刑事さんをしている。いつも忙しいふうで、朝は会えない事が多い。
夕方に帰ってきて、一緒に紅茶を飲んだ後、ピストルの掃除をして、そうして夕食を作ってくれる。
お姉ちゃんが疲れているときには私が料理したりもするのだけれど、どうしてもお姉ちゃんのより美味しく作れない。
「年の差だよ」とお姉ちゃんは笑って言うけれど、もっと他に、絶対に違う何かがあるんだと私は思っている。

ハンナさんという人は、アリス。アリスねぇ、ふぅん。
と、納得でもしているかのように、私の名前を何度も繰り返し唱えていた。
アリスといえば、つい最近読んだ小説の主人公の名前もアリスだった。
その子はいつも好奇心が強くて、お喋りで、冒険的で…まるで私と正反対だった。
共通しているところといえば、ピアノを弾ける事と、イングランド人である事くらいか。

母さんはイングランド人で、アメリカに来てロシア人の父さんと出会った。まだ１６だったらしい。らしい、というのは、直接母さんから聞いたわけではなく、父さんが酔いながらお姉ちゃんに愚痴としてこぼした話を、私が盗み聞きしつなぎ合わせたものであるからだ。
母さんは私を産んですぐに死んだ。その事で、父さんは私を責め続けた。
…だから、イワノヴナという父称は好きじゃない。どうしても父さんの事を思い出してしまうから。
それに、苗字のソーンツェワ。これも嫌だ。私は皆を照らす太陽（ソーンツェ）からは程遠い存在であるから。
もっと、そう例えばお姉ちゃんや、このハンナさんにこそソーンツェワはふさわしい。
お姉ちゃんはまさに、私の太陽（ソーンツェ）だった。私が父さんにいつものように怒鳴られていると、いつも父さんに反抗してくれた。いつも私を守ってくれた。今だって守ってくれている。これからもきっと。

「アリスちゃん。」ハンナさんが話しかける。「ジューショ、分かる？」
ジューショ…ジューショとは、何の事だろう。見当も付かない。…ジューショ？　？？
混乱して二人で困っていると、遠くに人影が見えた。おーい、ハンナー。と、叫んでいる。
ハンナさんの、友達だろうか。彼女が近づいてくる。私を見て、疑念の表情を抱く。
そこで二人は二言三言言葉を交わして、彼女が私に話しかける。

＊

「アリスちゃん。私は、クレア・ガーネット。今から、色々な言葉

で話すから、分かったら返事をして。」アリスちゃんは困っているようだけど、
まぁ、やれば分かるわ。とクレアは、予告通り色々な言葉で話しかけ始めた。
フランス語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語…分からないけれど、たぶんそんな言葉で話しかけている。アリスちゃんは明らかに戸惑っている。
クレアとは、幼馴染で親友だ。そして、クレアは言語に関して天才的だ。
ヨーロッパの言葉はネイティヴ並だし、東西アジア、アフリカの言語その他もほぼ完璧で、今は幾つリンガルなのかも分からないほどだ。カナダのケベック州出身で、母語が複数あった事も、彼女の言語に対する興味を小さな時からくすぐっていたのかも知れないけれど、直接の原因となったのは俺、ハンナ・ホセアだ。
俺の父さんは日本人で、俺とは日本語で接していた。クレアとその兄、ヘンリーが合衆国に越してきたとき、俺は初めて会う同年代の子に、何の疑問も持たず日本語で話しかけた。…これが、「私の言語に対する興味を確固たるものにしたのよ。」とクレアは言っていた。
今は大学で日本語を学んでいて、曰く、「私の人生を言語関係へと導いた全ての始まり」だから、だそうだ。
…あの時俺が日本語で話しかけていなかったら、クレアは今どんな道へ進んでいたのだろう？

で、通じたらしい。ロシア語が。そして住所を尋ねてもらうと、住所は分からないとの事だ。来た道も分からない、とも。そもそも分かっていれば迷う事も無いだろうに。何事も。
ともかく警察に連絡して引き取ってもらうとして、クレアとは別れた。たぶん兄ヘンリーの所に行くんだろう。
ヘンリーとクレア、ガーネット兄妹の両親は多忙で、世界中を飛

び回っている。家を空ける事も多い。
クレアにとっては、ヘンリーが親代わりみたいなものだった。クレアはそのお陰で重度のブラコンだ。
で、そのヘンリーは今小説家をしている。そしてクレアの夢は、翻訳家となって兄の小説を様々な言語に翻訳して出版する事、らしい。
まぁ、まず、一つの国で売れなければならないと思うけれど…。

電話がつながった。微かに南部訛りのある女性の声が応える。
「どうしました？」
「迷子の子が居るんですが…」
「名前とか分かります？」
「ええ、名前はアリスで、多分ロシア人の。」
「アリス…？」ここで女性は電話から離れ、向こうに話しかける。
ねぇ、イリス。ロシア人のアリスって、あんたの妹ちゃんのことじゃない？
え、嘘？！たったった。どたん。いたたた…。落ち着きなさいって、ほら。
と、そのやたら焦った様子のイリスさんとやらに電話がかわる。
「すみません、あの、そのアリスって子、白髪（はくはつ）をふたつ結びにしていて、１４０センチくらいの背丈で、
白のブラウスに紺のジャンパースカートと靴下、襟にピンクのリボンをしていて、９月５日生まれ、
１５歳のアリスですか？」
年齢と誕生日は知りませんけど「まぁ、外見はまさにそうですよ。」と言うと、
「すみません！その子、私の妹なんです。あの、かわっていただけますか？」
それにしても綺麗なイギリス英語だ。アリスちゃんに電話を渡す。
電話というモノは分かるみたいだ。姉妹がロシア語で会話し始める。

言語というのはつくづく不思議だ。知らない言語は雑音或いは不規則・無秩序に並ぶ文字の羅列としか捉えられない。なのに、分かる人たちには分かってしまう。まるで秘密の暗号のように。その暗号を解読して通訳するのが、翻訳家の仕事なのだろう。
クレアも、きっと。

話は終わって、電話は切ってしまったようだ。さて、俺はどうしたもんかな。すると、アリスちゃんがたどたどしく、「オ姉チャン、スグニ来ル、ソウデス。」教わった暗号を忘れないよう、言った。どうやら、本当に英語が苦手らしい。
アリスちゃんは、さっき渡したクッキーをひとつ、俺を上目遣いで気にしながら、口に入れた。
俺の身長が１６１センチだから、１４０センチとなると、頭ひとつぶんくらい背が低い。
大きな栗色の目をしていて、不安と安堵の色が浮かんでいる。顔付きは幼く、背が低いのも相俟って、とても１５歳には見えない。

ふと、目が合う。俺はにやりと笑う。アリスちゃんは恥ずかしそうに顔を伏せる。
そして、思い付いたふうにクッキーの袋を差し出す。
その、自分で作ったクッキーをひとつもらう。口に入れ、噛み砕く。固い。少し焼きすぎたかもしれない。
でも、アリスちゃんは問題なく（そして多分美味しく）食べてくれているようだ。確か、ロシアのクッキーは固いそうだから、そのせいかも知れない。
「おいしい？」つい、聞いてしまった。通じるのかも分からずに。
話しかけられたのが意外だったのか、アリスちゃんは顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。
少しして、こちらを覗き込み、小さく頷いた。

＊

言われた場所へ行くと、白い二つ結びが目に映った。と同時に叫んだ。

「アリス！」が、振り向く。そして、こちらにはっと気付き、小さく頼りない身体で、私に抱きつく。

あぁ、本当に、無事で良かった。今度再びこんな事が起きないように、しっかりと見ていて置かないと。

と、先刻の電話の女性と思しき人がこちらを見ている。声とは裏腹に、細身の短髪で、意外と中性的だ。

私は慌ててお礼を言おうとして、名前を知らない事に気付き、もじもじとしていると、

「ハンナです。ハンナ・ホセア。」と名乗ってくれた。

「ハンナさん。本当に済みませんでした。」

「いえいえ。じゃ、俺はこれで…」

帰ろうとする彼女を、アリスが引きとめた。

「ま、待って下さい。その…お礼がしたくて。」

アリスは、ハンナさんの手を握りながら、彼女を見据えて、言った。何故かその時は、不思議と通じ合っていたのだった。

「ありがとう（Большое Спасибо.）、ございます。」

ハンナさんは、にやりと言った。「こちらこそ（You, rewelcome.）。」

＊

…また、会えるのかな？

＊

きっと、また会えるさ。

2話

II

日本、京都。紅葉の真っ最中で、俺は従妹に会いに行く。五年ぶりだろうか？
父さんが単身赴任でアメリカの西の果てに行ってしまってから、随分と日本には来ていなかった。
それまでは、毎年のように来ていたのに。俺の事を、櫻子は覚えてくれているだろうか。
覚えているといえば、あの小さくて可愛い顔立ちの、まるで不思議の国からやって来た、アリスちゃん。
彼女も、俺の事を覚えてくれているだろうか。

と、本屋が目に止まる。
小さな古本屋で、アルバイトと思わしき女子高生が一人レジに立っているきりで、他に人は居ない。
「いらっしゃいませ。」俺は、平積みになっている適当な本を手に取って開き、その子の顔を窺う。
というのも、その子が、何となく例の、アリスちゃんに似た、物静かな、いつも何かを考えているかのような…そんな雰囲気を持っていたからだった。
ただ一つ違ったのは、その子は思いのほか積極的であった事で、俺が覗き見していることに気付くと、向こうから話しかけて来た。
「何か、入用でしょうか。」何の疑いもなく、日本語で。
「あ、ええ。それじゃあ。」と、手に持っていた本を、レジへと運ぶ。
「千と、五十円になります。」少しだけためらったのちに、「…日本語、お上手ですね。」

「あ、うん。こう見えて日系人なんで。」茶髪の碧眼で、白人の肌と顔付きのガイジンがネイティヴ並の日本語で話したら、確かに意外だと思う。が、俺の最も意外だった事は、
「…？もしかして、日本にイトコとか、居らっしゃりませんか？」
「ああ、居るよ。それが何か…」
「…ひょっとして、ハンナ、って名前じゃありませんか？」と、俺の名前を知っていた事だった。

初対面の人間に名前を知られているとは、面白い。何故かと理由を尋ねると、
その子はどうやら櫻子の友達で、よく俺の話、それに眼の色や特徴、日本語の堪能な事、その他その他をよく、延々聞かされていたのだそうな。
「あなたがハンナさん、ですか…」と、少し嬉しそうに、「私、椎名麻美といいます。初めまして。」
「え、ええ。こちらこそ。」じゃあまた、縁があったら、と、そこで別れ、ふと買った本のタイトルを見ると、
「ロシア語　とっさのひとこと」だった。
これも運命だろうか。

＊

ハンナさんと初めて会ってから、一週間が経とうとしていた。結局、あの後は一度も会えていない。
会いたいが為に、ついに外を出歩く習慣が付いてしまったほどだ。
…もちろん、迷子にはならないように。
朝起きて、洗面をし、紅茶を飲んで、シャワーを浴び、着替え、朝食をとり、紅茶を飲み、歯を磨いたら、
外に出る。

外は、思いの他あたたかい。私は、地面を一歩一歩踏みしめながら、あてどなく、歩く。
昨日は雨が降ったのか、地面が鈍く光っている。猫が道を通って、あくびをし、私から離れていく。
見上げると、あの日のような空が広がっている。
ハンナさんの、あの緑のパーカー、ベージュの帽子、色褪せたジーンズ、臙脂のマフラー、コーヒーの匂い、
青い瞳、サラサラした短い茶髪、そして、手袋ごしの手の感触…何もかも、覚えている。

けれど、彼女はここには居ない。そう、きっと居ないのだ。
もう、二度と会えないんだ。そうだ…そういう、運命にあるんだ。
自分で沈めた気持ちのまま家に帰り、そうしてエリック・サティの『ジムノペディ』を弾いた。
その音は、私の考えをより強固に、固めていく。その上に、私は座り込む。そうやって生きてきた。

＊

ついに櫻子に会える。そう思うと何となく気持ちがドキドキしてくる。
何と声をかけよう？「久しぶり」、それとも「元気だった」？考えながら歩いていると、そこに、彼女が居た。
「サクラコ。」自然と、声が出ていた。向こうもこちらに気付く。
そうして、駆け寄って来て、抱きしめられる。
「ハンちゃん！」懐かしい声が胸元で響く。…しばらくそのままでいて、俺を見て言う。
「元気やった？ウチねぇ、ずぅっとハンちゃんに会いたい会いたい思ってたんよ。
今、お茶淹れるさかい、待っててや。あ、上がって上がって。」

と、俺を招き入れる。

>i８７２４｜８３０<

昔より、凄く狭い気がする。この家は櫻子が一人で住んでいて、両親は本家というか、実家というか、とにかく広い家に住んでいる。櫻子の両親は、言っちゃなんだけれど金持ちなのだ。この家も別荘のひとつで、よくここに遊びに来ていた。

「ねぇ、」櫻子が話しかける。「これ、ウチ作ったんやけど、お饅頭…食べる？」

「頂くよ。」俺が左手を伸ばす。「あ」と、櫻子が驚いた表情を見せる。

「…どしたの」

「…ウチが、昔ハンちゃんに作ったげた、手首飾り。」

左手首の、赤と白の組み紐の事を言っているのだと、分かった。

「…あぁ、これ？ほら、だって、櫻子が俺の為に作ってくれたんだもん。ずっと、付けてるよ。」

櫻子は、言葉にならない、といった風に、嬉しそうに、笑った。

俺は、左手首の自傷痕が見えたのではと、内心冷やりとしていた。

＊

3話

ＩＩＩ

私は懲りずに、外に出ていた。半分、諦めきれずに。もう一度ハンナさんに会いたい、と強く願っていた。
私は、アリス・ソーンツェワには、友達が居ない。父さんは学校に行かせてくれず、
そして私はほとんど外に出ず、十五年を生きてきた。
本で「友達」という単語の意味を知った。友達の作り方が分からない。
どうすれば友達が出来るのか、分からない。
…ハンナさんは、初めて、お姉ちゃん以外で初めて、私に優しくしてくれた人だ。
ああいった人が、「友達」なのかも知れない。はっきりとは、確信を持っては言えないけれど。
もしかして、ひょっとしたら、ハンナさんは私の初めての「友達」になってくれるかも知れない。
…そう思ったから、別れるのが辛く、淋しかった。そして、もう一度会いたかった。

「アリスちゃん」呼びかけられて、固まる。そうして、ゆっくりと振り向く。
外ハネの明るい赤毛に、栗色の目、そして女性らしい体つきをした…
「クレアよ。クレア・ガーネット。覚えてる？」あの…、外国語の上手な。
「そうそう。どうしたの？まさか、また迷子？」
いいえ、その…違うんです。えと…ハンナさんに、また会えないかなぁ、って。

「ハンナ？ハンナはねぇ、丁度昨日、日本から帰って来た所よ。」
日本？日本というのは、いったい何ですか。
「日本てのは、国で…あ、そうだ。多分今パン屋に居るだろうから、…ハンナがね。一緒に行こっか？」

ついにまた、ハンナさんに会える。そう思うと、何となく胸がドキドキしてくる。
と、パン屋に着く。ここは…あの、クッキーを貰った、あのパン屋だ。
キィ、と音を立てて、扉が開く。無愛想な ― しかしまだ若い ― 眼鏡をかけた青年が一人、レジに座っている。
クレアさんは彼に話しかける。と、残念そうな声。
「ごめん…アリスちゃん。今日ハンナ、大事な用事があるって、そっちに行っちゃったって。」
肩の力が抜ける。また、会えない。…でも、近くに居る。
「あの、」私はロシア語で、その青年に、ゆっくりと話しかける。
「ここのクッキーは、誰の作ったもの…なんですか？」クレアさんが訳して、伝えてくれる。
「ハンナだ。ハンナが作った。」その人が答える。表情は心なしか、どこか淋しげに見える。
「この人はアルっていうのよ。アルバート・ベイカー。
私と、お兄ちゃんと、ギルと、そしてハンナ。五人仲良しなのよ。」
ギル…？確か、お姉ちゃんから、何となくその名前を聞いた覚えがある。

＊

「で、そのあと妹のアリスとやらは、無事に見つかったのか？」
ギルが話しかける。うん。ええとね、ハンナさんて方がね、保護し

ててくれてたの。本当に、無事で良かった。
「ハンナ？ハンナってもしかして、ハンナ・ホセアの事か？」
「あ、何かその名前、聞いた事ある。」
私の隣に居たスーも、口を挟む。
スーは、本名をスザンナ・マクローランといい、ケンタッキー州出身で肌黒い、私の六年、先輩だ。
よく、恋愛とか、結婚の話を私にしてくる辺り、恋人が欲しいのだと思う。
ここがよく分からない所なのだけど、どうして人はそう恋をしたがるのだろう？私には理解しがたい。
ギルが続ける。「マジで？ま、よくある名前だしな。
…昔からの友達でさ。俺、アル、ヘンリー、妹のクレア、そんでハンナ。よく五人で遊んだもんだよ。」
「へぇ…。」私とスーが同じような声を漏らす。
スーは、ギルと同じように、自身の学生時代なんかを振り返っているのだろうか。
私には、そんな楽しい過去は無かった。モスクワの外れで、ウォトカに酔って怒鳴り散らす父さんと、泣きじゃくるアリスの為に、日々、必死で働いていただけだった。学校にも行けなかったし、同年代の友達も居なかった。
だから、ギルやスー、そしてハンナさんたちの、そういった過去が、少し羨ましい。

＊

私は岐路についた。アメリカに居る。きっと会える。
…でも会えたとして、ハンナさんは私の事を覚えてくれているだろうか。
覚えている訳が無い、か。それが普通だ。大体一度会っただけの、迷惑ばかりかけた、

言葉も通じない迷い子の事なんて、忘れる方が自然なんだ。
涙の粒がひとつ、ふたつと落ちた。声を押し殺して、私は泣いた。
父さんに怒鳴られた時はいつも、声を出さないようにしていた。
きっとまた、その事で「うるせぇ」と怒鳴られるだろうと、予想が付いていたから。
だから今でも、話すときに言葉を飲み込んでしまう。本当に、私なんかが話をしていいのだろうか、と。
顔を上げて、手で涙を拭う。

目の前にハンナさんが居る。
「アリスちゃん？どうしたの、大丈夫？」
驚いて、嬉しくて、声も出なかった。

4話

英語が分かりたい、と思った。結局あの後は、私は只あたふたして、

「大丈夫そうだね。」とハンナさんは笑って、「またね。（ｓｅｅ ｙｏｕ.）」と別れたのだった。

「またね。（ｓｅｅ ｙｏｕ.）」と言ってくれたのが、また会ってくれるんだ、覚えていてくれたんだと分かって、

すごく救われたというか、重ね重ね、嬉しかった。

だから、ハンナさんともっと一緒に居たい。会って、お話がしたい。

だから、英語を話せるようになりたい。

お姉ちゃんにその事を話すと、「英語　日常フレーズ集」といった本を買ってくれた。

新しく、ひとつの折り目も付いていない。

「とにかく、動くたびにその動きを、あとは目にとまったものとかを、英語で表現していくのが、コツよ。

そうすれば、自然と身に付いていくから。…そう、だから、単語をたくさん覚えるのが良いわ。」

と言って、露英辞典もくれた。これは、昔、お姉ちゃんが使っていたものだそうだ。

表紙はよれ、手垢が染み付き、端の辺りは少しめくれている。優しい紙の触り心地だ。少し、ドキドキする。

「英語ヲ学ブ。」まず、言った。このくらいの英語なら、分かるのだが。

その「日常フレーズ集」を開く。「Ｓｅｌｆ　Ｉｎｔｒｏｄｕｃｔｉｏｎ／Ｇｒｅｅｔｉｎｇ」とある。意味は、分からないけれど。次の頁を開く。「Ｍｙ　ｎａｍｅ　ｉｓ．．．」という文章が、名札を付けた人の吹き出しに囲まれている。

これは聞いた事がある。ハンナさんも確か言っていた。
「私ノ名前ハ、アリスデス。」
左の頁を見る。
子供と老人が、それぞれ「I' m 8 years old.」「I' m 70 years old.」と言っている。たぶん、年齢の事かな。
「私ハ、15才デス。」
次の頁を開く。
国旗を持った人たちが、「I' m American.」「I' m Russian.」「I' m British.」などと、言っている。
国…？私の国は、どこだろう。

＊

俺は、日本人なのだと思う。食事の時は箸を使うし、炭水化物と合わせて食べ、スープはすするし、納豆にも生魚にも特に抵抗は無い。普通は日本語で物を考え、よくお辞儀もするし、食べる前は「頂きます」、キリストやアッラーなどは数ある神のうちのひとつと、「八百万の神」寄りの思考だ。
でも、見た目はいわゆる「外国人」だ。

「ハンナちゃん？」レジに伏せっていた所を、ヘンリーに呼ばれた。今日は、クレアと一緒じゃないんだ？
「うん。あいつは…今日は確か、大学の友達と買い物に行くとか言ってたかな。何ていったっけ、えーと…」
「シェーラじゃない？シェーラ・レモン。」
「そう、その子だよ。シェーラちゃん。」
シェーラは、スコットランドからの留学生で、クレアと同じ大学の、同じ日本語科に通っている。

なんでも、日本のアニメーションが好きで、そこから日本に興味を持ったとか。
一度クレアと彼女の部屋を訪ねてみたら、それらしいＤＶＤや衣装で、いっぱいだった。
全く、何が人の人生を変えるのか、分からないものだ。
「おい、ヘンリー。」後ろで生地をこねていたアルが言う。
「ウチに寄ったんなら、何か買っていけよ。」いつも、これだ。
本当は、何も買ってくれなくても、友達が訪ねてくれるだけで、嬉しいくせに。
「分かったよ。今月厳しいんだけど…」と、レジの横の袋を手にとって、俺に差し出す。
「５０セントになりまーす。」日本円にして約５０円。安いものだ。
「で、本題はこれ。」と、二冊の本を、黒く、重そうな鞄から取り出す。
「僕の新作。知人友人に配って歩いてるんだ。宣伝よろしく。」
と、足早に去っていった。
『Ａｎ　Ａ．Ｉ．　Ｃｈａｎｎｅｌ　ｈａｄ．．．』…訳すとすれば『Ａ．Ｉ．チャンネルは…』、か？変なタイトルだ。
作者名は『Ｒｅｇｎｙ　Ｎ．　Ｈａｔｔｅｒ』…レグニー・Ｎ・ハッター、帽子屋。
前に聞いたけど、ヘンリーの名前のアナグラムだ。
「あいつの本、あんまり売れてないからな。」
「そうなんだ？」

＊

目が覚めると、もう昼だった。本は、「Ｉ'ｄ　ｌｉｋｅ　ｔｏ　ｈａｖｅ　ａ　ｃｕｐ　ｏｆ　ｔｅａ／ｃｏｆｆｅｅ．」で、止まったままだ。
慣れない事をするから、いつの間にか眠ってしまっていたようだ。

と、机の上のメモが目に留まる。
「アリスへ。お姉ちゃんは、射撃場へ行っています。出かけるときには、きちんと鍵を閉めていってね。暗くなる前には帰ります。」
今日は、日曜日だったか。お姉ちゃんはよく、日曜に射撃場に行く。この間は、私を外に誘ってくれたから、行かなかったけれど。
…私も、外に行こうかな。ハンナさんに、会えるかな。

＊

「じゃじゃ。この帽子コァ、ひんでぇめごいなス。」
「そうねぇ…値段もそんなに高くないし。」
シェーラは、道路沿いの小物売り場で、縁日の子供みたいにはしゃいでいた。
この子は…といっても、私の方が三ヶ月ほど年下だけれど、とても素直なのだ。
何も知らない赤ん坊の様な、逆に何もかも知り尽くした老人のような…分からないけれど、
時間のゆったりとした田舎ならば、こんなおおらかな子も育つのかもしれない。
と、白い二つ結びが目に映った。向こうもこちらに気付く。
「クレアさん」この子も純粋な子だ。目を見れば分かる。
「じゃ、めんこい童ッ子だごどぉ。んが、名前コ何て言やァ？」
「あーっとねぇ…この子はアリスちゃん。ロシア人よ。」私は慌てて説明する。
「あやま、ロシヤ人！おらァ初めでロシヤの人さ会っだがも知んね。」
「…クレアさん、この人、何て方なんですか？というより、これは英語なんですか？」
英語かと聞かれれば、難しい問いだ。シェーラの話しているのはスコットランド語で、

いわゆるスコットランド・ゲール語と古英語からの影響が強い言語で、両方が混ざったような言語であるから、
英語であるといえば英語だ。でも、アメリカやイギリスの英語に慣れた人間にとっては、分かりづらい発音と独特の単語だ。
英語じゃないと言われれば、英語ではない。
「えぇとねぇ、この人はシェーラ。私の友達で、スコットランド人。話しているのはスコットランド語で、
…何て言うのかな。アリスちゃん、綺麗なロシア語話すけど、そうね。
英語に対するスコットランド語は、ちょうどロシア語に対するウクライナ語のようなものよ。」
何て、スコットランドとウクライナの方に失礼な説明だろう。しかし、幸か不幸か、あまり伝わらなかったようだ。
「スコットランド…ウクライナ…？」と、アリスちゃんは首をひねっていた。
「まー、ともかく、こっただ風に会えだのも何がの縁だしょ。よろすく。」
とシェーラは、アリスちゃんと握手をした。全く、その通りだ。
「あ、クレアさん。そういえば、教えてもらいたい事があるんです。」
「なぁに？」
「英語って、どうしたら上達するんですか？」
「…どうして、英語を学びたいの？」
隣でシェーラが「何か、仲間外れー。」と、ひとりぶーたれていた。

＊

少し、クレアさんの眉が近寄った気がした。何か、気に障る事を言ってしまっただろうか。
シェーラさんも、少し不機嫌そうな顔をしている感じがする。

…二人で仲良くしていた所に、私などがずかずかと割り入って、仲を壊してしまったのだろうか。
私のせい…そう、いつも、私が悪いんだ。目がぐるぐるして、世界が歪み、のどの奥が辛くなる。
瞬きが多くなる。呼吸が少し、荒くなっていることに気付く。
「ハンナさん」自然と、その名前が出てきた。
「そうハンナさんと、もっとお話がしたいんです。」
クレアさんは、きょとんとしていた。少し表情が緩んだ。
「本当に？実は私も、ハンナと話がしたくて日本語を勉強してたのよ。」
同じだね、と笑った。私は、同じようには笑えず、生返事をする他なかった。
そうして、色々なコツを教えてくれた。
ロシア語には英語からの輸入語彙が多い事、会話は単語を並べるだけでもある程度は通じる事、
どうして、動詞に「s」が付いたりつかなかったりするのか…色々な事が、分かった。
けど、どうしてクレアさんがあんな表情を見せたのか、それは、分からなかった。

＊

カウンセリングは、木曜と日曜の午後三時から、週二回だ。時たま、ズレはするけど。
室内から名前を呼ばれて、中に入る。落ち着いた雰囲気の、柔らかい照明の部屋だ。
入口の向かって左側に、先生が座っている。俺は、右側に座る。
「どうだ、調子は」
「悪くないよ。」
「コーヒーでも飲むか」

「うん」
先生は立ち上がって、二つのカップに、ブラックで砂糖を入れないコーヒーを、注ぐ。俺は話し始める。
「この間、ほら、言ってたじゃん、日本に行ったんだよ。従妹に会いに。櫻子、俺の事覚えててくれて、嬉しかった。で、ご飯も作ってもらって、三日くらい泊まって、じゃ、またね。って別れたんだ。」
先生がカップを両手に持って、ソファに戻る。
「またね、って言ってくれたのが、また会えるんだって凄く実感が涌いてきて、重ね重ね、嬉しかった。」
先生は頷く。
そのほかに、アルバイトの事、クッキーの売れ行き、ヘンリーから貰った本、最近の不安悩み事、
それと、アリスちゃんの事。
「最近、また会ったんだ。」コーヒーを一口飲む。
「背の低い子でさ。ちょっとだけ猫背だから、余計小さく見えて…人の顔を、表情をよく見てた。
そして、いつも怯えている風だった。それが…」
「お…時間だな。」先生は、腕時計を見て言った。
「続きはまた次回、聞かせてくれ。」
「うん、分かった。」昔の俺と似ている、という言葉を飲み込んで立ち上がり、ドアの前で振り返って言う。
「またね、フランク先生。」

＊

5話

V

私ハ起キル。私ハ顔ヲ洗ウ。紅茶ヲ淹レテ、飲ム。しゃわーヲ浴ビル。着替エル。
ぱんトみるくヲ食ベル。歯ヲ磨ク。外ニ、出ル。
英語である程度、話せるようにはなってきたと思う。でもまだ、英語で考えるのは難しい。会話ができるか、不安が強い。
外は、少しだけ寒い。足は自然と、あのパン屋へと向かう。
最近はよく、散歩の道すがらあの店の前を通るようになった。道筋も覚えた。でも、まだ一人で中に入ったことはない。何となく、気後れしてしまう。
ちょっとだけ、店の中を覗く。ハンナさんが居る。と、こちらに気付く。笑って、手を振ってくれる。
顔が赤くなってくるのが分かる。思わず、走り出してしまう。
あぁ、どうして、私はこんなにも引っ込み思案なのだろう。けれど胸はまだ、ドキドキしている。
流れている血液が、自分のものではない感じだ。興奮するというのは、こういう感覚なのだろうか。少し、息が苦しい。足を止める。
考えてみると、私は今さっき「人の顔を見て逃げ出す」という大変な失礼をしてしまった。どうしよう。
ハンナさんの機嫌を、割れた卵（Ｈｕｍｐｔｙ－Ｄｕｍｐｔｙ）なまでに壊してしまったのではないだろうか。

父さんは、私のせいで機嫌を損ねたことは、いつまでも覚えていた。私がおねしょをしたこと。転んで服を、全身を泥だらけにしたこと。
喋ること。皿を割ったこと。外に出たこと。そう、私が外に出るの

を彼は嫌った。
「お前みたいな奴が、母さんを殺したお前が、のうのうと生きてやがるのが許せないんだ」
そうだ。私はだから、外にも出ず、父さんの機嫌を損ねないよう、細心の注意を払って、生きてきたんだ。
何事も、起こさないように。
何も起きなければいいと思っていた。父さんが酔い潰れて、或いは外に出ている間だけ、お姉ちゃんと二人きりになれて、本が読めて、ピアノが弾けて、私は、解放された。

「つかまえたっ（Gotcha）」不意に腕をつかまれたので、私はあっと声を上げた。
「どうしたの？また、泣きそうな顔になってるじゃん。」思いがけず、追いかけてきていたのであった。
「ア、エト、ソノ…」どうしよう、全く言葉が出てこない。
また、「またね」で別れてしまうのだろうか。それを、この先もずっと？変わらずに？
「アノ…」ハンナさんは、私の言葉を待ってくれている。真っ直ぐな瞳で、太陽の光を受けて、輝いている。
あぁ、眩しい。私の目はいつも暗いところしか見ないから、すっかり闇に慣れてしまっている。
けれどハンナさんは、お姉ちゃんは、太陽は、こんな私でも、平等に照らしてくれる。
「今日、寒いけど、アリスちゃん、その格好で大丈夫？」ゆっくりと、丁寧に話しかけてくれる。
私はいつもの、紺のジャンパースカートに白のブラウス、そしてピンクのリボンだった。
「エ…？ア、ハイ。寒イノハ、平気デス。」ろしあ人ナノデ、と付け足した。通じて、いるのだろうか。
「そっか…あのさ、今日俺、仕事休みなんだよ。だから、ちょっと

一緒に歩かない？」

＊

そう言った時のアリスちゃんの表情といったら、なかった。
半泣きで、顔を赤らめて、困惑と驚きと、口元には笑みが浮かんでいた。
でもすぐに、普段の、あの悲しげな表情に戻って、言った。
「デモ…悪イデス。私、人ニ迷惑バカリ…」
いいからいいから、と手を握って、少し強引に歩き出す。手は小さくて、少し震えている。
「アリスちゃんはさ、この街に来て、長いの？」
ふと疑問に思ったので、聞いてみた。
「…5年ニナリマス。」俺の顔色を窺っている。
この小さな街で、5年間、一目も会わなかったなんて、アリスちゃんは一体どこで何をしていたの？…などと聞かれるのだと、思っているのだろう。この子は、そういう考え方をする子だ。何となく、それは分かる。
いつも自分が悪いと思ってしまう人間は、その態度を崩すことが無い。
「同じだね。」
「エ？」
「ううん、何でも。」
「それよりさ、アリスちゃんの家って、ここから近いの？」
「ア…ハイ。近イデスケド…」
「じゃあちょっと、案内してよ。行ってみたいから。」
「…ハイ？」

「お邪魔しまーす。」靴を脱ぎかけて、履き直す。俺たちの他には、誰もいない。

「エト、オ姉チャント二人デ、暮ラシテマス。」
そうなのか。でも、女の二人暮しにしては質素というか、殺風景というか、どことなく俺の部屋に似ている。
「アノ、ハンナサン」意外にも、アリスちゃんから話しかけてきた。
「オ茶デモ、飲ミマスカ」気を遣ってくれているふうだ。
「じゃあ、いただくよ。コーヒー、淹れてくれる？」
ハイ、分カリマシタ。と、少し嬉しそうに、台所へと小走りで向かった。人に何かお願いされるのは、嫌いじゃないみたいだ。
もう一度、部屋を見渡してみる。テーブルがひとつと、そこに椅子がふたつ。多分、姉妹のぶんだろう。テレビは無い。
壁には絵や写真など、そういった類のものは一切張っておらず、精々時計やカレンダーがあるくらいだ。
そしてすぐ右手に、小さなアップライトピアノがある。椅子は無い。立って弾くのだろうか？そもそも、誰が？
アリスちゃんが台所から出てくる。そして、真っ赤な顔でこう言った。
「アノ…ハンナサン。こーひーッテ、ドウ淹レルンデスカ？」

＊

恥ずかしい。普段は紅茶しか飲まないから、コーヒーの淹れ方など分かるはずが無かった。
のに、見栄を張って。私は、なんて人間だろう。
幸い、コーヒーの粉やフィルターなどの、そういった最低限のものはあった。
お姉ちゃんはミルクティー派だけれど、万が一の来客に備えていたものだった。その「万が一」に、この有り様だ。
ハンナさんに、無知な、無教養の、馬鹿な子供と言う印象を与えていないだろうか。
しかしハンナさんは、「あ、そうなの？まぁ、お姉ちゃん　――

イリスさん、イギリス英語だったし、もしやとは思ってたけど。」と、てきぱきと慣れた手つきで、あっという間に準備してしまった。カップは私の、お姉ちゃんの、「万が一の」来客用とがあったけれど、
ハンナさんは偶然にも（必然かも知れない）来客用のを手に取った。カップの上にフィルタのセットされたドリッパーを載せて、お湯を注ぐ。
私は薬缶を受け取って、ティーポットに注ぐ。
「アリスちゃん、ピアノ弾くの？」
ふいに、尋ねられた。
「エ…？ア、ハイ。デモ、少シダケ、デス。」
「じゃあさ、弾いてみてよ、『少しだけ』で良いから。」
「ヘ…？ム、無理デス、出来マセンヨ…。ソノ…下手、デスシ…」
私は拒んだけれど、結局は押し切られて弾く事になるだろうと言う事には、何となく感付いていた。

後ろにハンナさんが、お姉ちゃんの椅子に座っている。
私は自分の椅子を机から引っ張って来て、ピアノの前に座る。
振り返ると、どうぞ、といったふうに、ハンナさんが目配せする。
私は少し緊張して、ふと思う。
お姉ちゃん以外の人にピアノを聴いてもらうのは初めてだ、と。
息を少し吸う。そして、鍵盤を叩いて、第一音を鳴らす。曲は、ヨハン・パッヘルベルの「カノン」だ。

＊

「この曲、何だか聴いた事がある。」
射撃場へと向かう途中、スーの運転する車のラジオから流れてくる曲の事だ。
「これはアレよ、カノンとかいうやつ。クラシックの曲ね。」

「あ…思い出した。アリスの、…妹の、よく弾く曲の一つなんだ。」
いつも怒鳴られ、身体を丸めて怯えていたアリスも、ピアノを弾いている時だけは、堂々としていた。
「あんたさぁ、てかあたし達さぁ、2年くらいの付き合いじゃん？」
そうだね、と、私は次の言葉を待った。
「あんた、自分の事言わなさすぎなのよ。妹が居るなんて、こないだあんたが”アリスとはぐれたー！”って、半ベソかいて、非番の日に署に飛び込んでくるまで、知らなかったわよ。」
「あれ、話した事なかったっけ？」
「無い。」と、きっぱり言われてしまった。確かに、「自分の事言わなさすぎ」かも知れない。
人に言えるほど、楽しい経験も無かったから。
「合衆国に来る前はロシアに居たんでしょ？それまでは、何してお金稼いでたの？」
正確に言えば、8才までは合衆国に居た。
ソ連が崩壊する年の9月5日、アリスが生まれて、母さんは死んだ。
父さんは、イワン・ヴァシーリエヴィッチ・ソンツェフは、あの日以来、変わってしまった。死者の霊に縋って生きる、そんな人になってしまった。悲しさから故郷を求めて彼は、生まれたばかりのロシア連邦へと我々姉妹を連れて行った。
そして、アリスが8才になった年の冬、彼は姿を消した。
結局、父さんが最後まで愛していたのは、母さんだった。私たち、姉妹ではなく。
それは言わずに、質問にだけ答えた。
「新聞配達とか、荷物運びとか…仕事が無いときは、貯金を崩して、だましだまし。
貯金が底を付いて、仕事も無かったときもあった…かな。」
「その時は、何してたのさ？」
「え？狩り。」
「狩りぃ？」

本当に、狩りをしていたのだ。お金も仕事も無くて、どうしようかと歩いていたら、森に迷ってしまった。
冬の夜で、雪も降り出して、体温は奪われ、眠たくなり、そのまま凍死してもおかしくなかった所を、猟師さんに拾ってもらったのだ。
「で、その人にダメ元で頼んでみたら、いけたっていうか…」
私は彼の事を師匠と呼んでいた。７０歳は超えていそうな、白髪の、長いひげを生やした人だった。
師匠から銃の撃ち方を教わった。手入れの基本を教わった。自然への感謝の心を、教わった。
「…でもまぁ、何か納得だわ。あんた、妙に射撃の腕あるし。」
「そうかなぁ…」
そうこうしているうちに、射撃場に着いていた。カノンは、いつの間にか終わっていた。

＊

紅茶はすっかり渋くなっていた。出過ぎた紅茶を、勿体ないとは思いつつも、一度ティーポットから捨て、もう一度淹れ直し、テーブルに戻る。
「いやぁ、上手だったよ。また聞かせてね。」と、ハンナさんが褒めてくれる。
私は何だか、むずがゆくなった。口元が緩み、顔が紅潮してくる。変な顔をしてるんだろうなと思うと、
余計に恥ずかしくなって、うつむいて、紅茶を飲む振りをした。
「アリスちゃん、好きな食べ物ってある？」
へぇ、と別段驚きもせず、ハンナさんは生返事をした。
　もっと、面白い答えを期待していたのだろうか。ロシア人だから
ピロシキが好きとか、
お姉ちゃんの作るカーシャやシチが好き、だとか。
そうでなければ、胡椒を入れ過ぎたスープとか、濃厚な緑色のスー

プとかいう、奇をてらったというか、そんなふうに答えれば良かったのだろうか。
「アリスちゃんさぁ、」
「ハイ。」私はびくっとして答えた。
「会うときいつも、その服だよね。」
「…コレシカ持ッテナイデス。」
この服は、母さんが着ていたものだそうだ。
母さんは背が低く、童顔で、病弱だったらしい。
白のブラウスと紺の靴下は、同じ種類のものが何組もクローゼットに入っている。
安く売っていたのを、お姉ちゃんが買い溜めしてくれた。しかし、母さんの丈夫なジャンパースカートとピンクのリボンは一組しかなく、洗濯するときは代わりに、私に似合って地味な、灰水色のスカートを履く。
「そうなんだ。」
「ソウデス。」
ハンナさんは、何が言いたいのだろう。
少しの間、カップのこすれる音と、呼吸の音が続く。
ハンナさんは何か考えているふうだった。じっとして動かない猫のように、私には思えた。
「アノゥ…ソレガ…？」
「うん。アリスちゃんはね、もっとオシャレして良いと思うよ。」

＊

「…ハイ？」といった、アリスちゃんの心の声が聞こえてくるようだった。
「いや、あのね。俺、思うんだよ。若いうちに冒険はしておくべきだ、って。服でも、それこそ旅でもさ…
例えば、３・４０才になってミニスカートは履けないじゃん？だ

から、出来るうちにやっておけば、
　後々になってあぁ、やっておけば良かった、って悔しい思いをするよりは、良いんじゃないかな、って。」
アリスちゃんにというよりは、自分に言った。だから、目の前の小さな女の子は、何を言われているのかが分からないといった風に、目をぱちくりさせ、口をぽかんと開けていた。
「ほら、何てーの…アリスちゃん、可愛いから。もっと可愛い服着たら、もっと良いんじゃねーの？ってーか…」
少し間があって、言葉の意味を理解して、赤くなってうつむいた。本当に度々真っ赤になる子だ。青い苺が赤く熟れるみたいに。
　ふと、その苺をもっと赤くしてやろうと思い付き、俺はいたずらっぽく言う。
「そうだ。一緒に、買い物に行こうよ。で、色んな服を見てまわって、
　どの服が一番アリスちゃんに似合うのか、端から端まで一つずつ…」
「イ、イ、今カラデスカ？！」少し、声が裏返った。大きな声を聞くのは、初めてだ。
「今ハダメデス。凄ク恥ズカシイデス。ソノ…心ノ、準備ガ…」
あ、そう。と俺は素っ気なく答えた。それがアリスちゃんには堪えたらしく、俺は、取り繕うように続けた。
「じゃあ、俺の携帯電話の番号を置いていくから、その『心の準備』が出来たら、
　明日でも一週間後でも一ヶ月後でも良いから、電話して。」
と、電話の横の、使われていなそうなメモ用紙に１０桁の番号を書き殴った。ついでに、名前も。
　そのメモを手に取って、アリスちゃんは俺の顔と紙とを、不安そうな、でもはにかんだような眼差しで、忙しく行き来させた。
「大丈夫！絶対、ついていってあげるから。」と、小さな肩をぽんと叩く。大きな瞳が俺を見る。

＊

５発だけ入った弾倉を拳銃に叩き込み、遊底止めを押し下げ、初弾を装填する。銃を持った右腕をぴんと伸ばして、左手は曲げて銃把に添える。

肩の力を抜いて、標的を狙う。２５メートル先の、人型標的（マン・ターゲット）。

ゆっくりと、引鉄を絞る。ぱんっ、という乾いた音と共に、手に衝撃が走る。自動で薬莢は排出、弾丸は装填され、ばすっ、と紙の破れる音が聞こえる。

右手にあるスイッチを押して、標的を手前にういーんと引き寄せる。弾丸は、丁度心臓の位置を撃ち抜いていた。

「お見事。」後ろに居たスーが手を叩く。「流石、元狩人ね。」ふふん、と鼻を鳴らす。

「ううん、ただ銃が良いだけだよ。」

標的を元の位置に戻し、残りの４発を撃ち込む。手前に寄せてみると、穴は３つしか開いていない。

「５発のうち、２発は同じ穴を通った、て事？」あ、何か今の、やらしい表現ね、とスーは言った。

そういう事に疎い私は、よく分からないけれどと軽く流して、「多分、２発は外れたんだよ。」と言った。

「あんたが外す訳ないでしょ。それにほら、良い銃なんでしょ？」

「スーは、撃たないの？」詰め寄るスーから逃げるように私は言った。

「あたし？あたしは、内勤だから。」

「でも、折角来たんだし。」と、標的をセットし直す。

仕方ないわねぇと、腰から中型の回転式拳銃を抜き、輪胴式弾倉に６発の弾丸を装填して、右手だけで構える。引鉄を、続けて６回引く。

４発が辛うじて胴体周辺に、１発は左手に、１発は紙の端っこに穴

を空けていた。
「ま、こんなもんでしょ。」と小さく溜息をつきながら、空薬莢を排莢する。カランと音を立てて、落ちた薬莢たちは淋しく転がる。

帰り道、喫茶店に寄った。たぶん、初めて入るお店だ。
「いらっしゃませ。何サ…何に、致しますかぁ？」イギリス風の発音だ。でも所々、田舎っぽいところがある。
「あたしはホットミルク。砂糖多めに。あんたは？」
「私はミルクティー。」
かしこまりましたぁ、あちらの席で少々お待ち下さぁい、と言われたので、大人しく座る。
「ここ、喫煙席なのね。灰皿が置いてある。でも、吸った後って感じじゃないわね。」
「どうして分かるの？」自分でも馬鹿な質問をしたと思う。吸殻が無いからに決まっている。
「そりゃ…灰や、吸殻や、匂いがしないもの。でも、最近は皆、全然吸わなくなったわね。」
確かに。私としては、アリスの健康を考えると良い事なのかな、と思う。
「ま、あたしだったら匂いだけで銘柄が分かるかな。色々、試してたから。」
と、スーは少し自慢げに言った。私は、少し意外に思った。
「スー、煙草吸うの？」
「最近はめっきり。若い頃はね、健康なんて気にしてなかったし。
ま、今吸わないのはそのせいじゃなくて、お財布の方がね…」
キツいのよね…と、窓の外を見た。
よくよく考えてみたら、スーは初めての、同じ年頃の友人かもしれない。
スーにしてみたら、２９のあたしと２３のあんたを『同じ年頃』なんて、と言うかも知れないけれど。

警察官になる前は、友達どころか、知り合いでさえ指で数える程も居なかった。
今は、スーが色々良くしてくれたから、職場に友達も増えて、色々な人に出会えて、本当に良かった。
「ありがとうね。」スーは頬杖をついたまま、目だけこちらを見た。
「え、急に、何？」
「ん、いや、何となく…」
おかしな子ね。と少しスーは笑い、窓の外に目を戻す。私も外を見遣る。月が顔を出し始めている頃だった。
　ウェイトレスがカップを二つ、持って来た。
「お待だせいだし…」じゃなくて、と小声で言い、
「お待たせいたしましたぁ。ご注文の品になりまぁす。」と、言い直した。
その後は二人で他愛のない会話をして、また明日、と別れた。

　家に帰ると、アリスがテーブルで眠っていた。
「アリス？」呼びかけても返事が無いくらい、ぐっすりと眠っていた。
よくある事なので、紅茶でも一緒に飲もうかと思い（紅茶は何度飲んでも飽きない）、
起こしてあげようと近付き、私は気付く。
アリスが笑っている。番号の書かれたメモを握りしめ、楽しい夢でも見ているのだろうか、口元は緩み、目元は穏やかで、しわの寄っていない眉間で、幸せそうに寝息をたてている。
　あぁ、今まで、１５年間で、こんなに幸せそうなアリスを見た事が、あっただろうか。こんなに幸せな気持ちになった事が、あっただろうか。アリスが、笑っている。幸せそうに、眠っている。いつも泣いていて、不安そうな顔付きで、何かに怯えているあの子が。
笑って、眠っている。
私は、せめて風邪をひかないようにと、起こさないようにそっと、

自分の着ていたジャケットを、妹の肩にかけた。

＊

6話

VI

１０桁の数字と、『Ｈａｎｎａｈ　Ｈｏｓｅａ』とが書かれたメモ。私はそれを、ブラウスのポケットに仕舞う事にした。
「洗濯するとばらばらに破れて失くなっちゃうから、洗濯機に入れる前には絶対に出しておいてね。」
という恐ろしい宣告をされたので、忘れないよう、時々取り出しては、その所在を確認する。
ハンナさんの字は丸みがあり、少し崩れているけれど、書き慣れているふうで、きちんと文字（アルファベット）として認識できるし、また独特で優しく、堂々ともしている。文字のひとつひとつが、『俺は、紛れもなくハンナ・ホセアだよ。』と、主張しているかのようだった。

今日は平日だから、お姉ちゃんは仕事だ。クレアさんやシェーラさんは学校…なのかな。
ハンナさんも、仕事だろうか。一体、今は何をしているのだろう。
と、玄関のベルが、ちりん、と鳴る。誰だろう、平日の朝から訪ねてくるなんて。
もしかすると、宅配便の人だろうか。家では何か贈り物をしてくれるような親類や友人関係は無いし、する相手もいないけれど、一度、近くの家に届くはずだった郵便物が間違えて配送されそうになった事がある。
お姉ちゃんは出掛けていて、私は英語を話せずに、相手の、業者の方を困らせてしまった。
あの、参ったなぁとでも言いたげな苦笑いは今でも覚えている。私にとって、たくさんある苦い思い出の一つだ。

…今は、きちんと対応できるだろうか。
　そっとドアノブをひねる。…あ、悪い人だったらどうしよう。
けれど嬉しい事に、すぐにその不安は消え去った。ハンナさんだった。両手で、宅配便の人のように、ピザの入っていそうな箱を抱えて。
箱からは、微かに湯気が揺らめいていた。
「ありがとう。開けられなくて。」
何ダカ、甘イ匂イガシマス。と、私は言った。
「ふふん、これ？これはね、アリスちゃんがリンゴ好きだって聞いたから…」
と、ふたを開け、背の低い私でも見られるように、低く、傾けてくれる。
「コレハ…」パイだった。それも、立派な洋菓子店で売っていそうな。
焼き色もこんがりとしていて、湯気が立ち昇り、まだ温かそうだった。
「ア、私、紅茶トこーひー、淹レテ来マス。」
実を言うと私はその時まだ朝食前で、それを早く食べたくて仕方が無かった。

「ほら、食べて食べて。」
ハンナさんは、そのアップルパイをナイフで器用に8等分して、一切れを私に差し出してくれる。
「ア、ハイ。イタダキマス…」
それを受け取ると、パイは温かいどころかまだ焼き立てのように熱く、ずっと持っていると火傷をしてしまいそうな程だった。
一口分を千切ろうとしたけれど、やはり熱いので、両手で生地の端の辺りを持って、かじる。
その拍子に、リンゴを煮詰めた、ミンスというのだろうか、それがポロッとこぼれて、テーブルの上を小さく転がる。

同時に独特の、くせのある甘い香りが広がる。飲み込んでも、まだパイは熱かった。
「シナモンがちょっと強いかな？」ハンナさんも、一口食べる。やはり私のそれより、一口の量は多い。
「しなもん…」私はその聴き慣れない単語を呟き、紅茶を口の中に流し込む。紅茶がぬるく感じる。
「デモ、凄ク美味シイデス。」それに、わざわざ私の為に買ってきてくれたのだから、余計に嬉しい。
「本当に？じゃ、毎日作ってきてあげよっか、なんて。」ハンナさんは笑いながら、カップで顔を半分隠す。
「…エ？ハンナサンガ作ッタンデスカ？コノ、あっぷるぱい…」
「…え？買ってきたものだと思ってたの？」予想外の発言だったらしく、ハンナさんは目を大きくして言った。
「ダッテ、コンナ立派ナモノ、作レルナンテ…」
「あ、そう？なんか褒められてる感じで、嬉しいな。」
と、ハンナさんは微笑んだ。あの、いつものにやりとした笑みではなく、太陽が毎日昇って沈むくらい、自然にこぼれた笑みだった。

＊

「イリス。」
先輩の老刑事であるハツシロさんに呼びかけられ、目が覚める。ここは巡回中の覆面パトカーの中で、私はつい、うとうとしていたようだった。
「あ、すみません…」寝惚け眼を擦りながら、彼の指差す方向を見る。
一台の車が銀行の前に停まっている。東から西までずっとそれ一台で乗り続けてきたような、そんな車だ。
更に注意深く見るよう促され、車の隣に随分と煙草の吸殻が溜まっている事に気付く。

「分かるな？」
私はうなずく。脇の下に手を伸ばして、拳銃の安全装置を外す。
「お前は中だ。俺は車の相方を警戒する。」
私は車を降りた。

銀行の店内はまだ平和だった。まだ、行動は起こしていないようだ。
私は列に並ぶ振りをしながら、当たりの様子を伺う。腕を組んでイライラしている女性、椅子に座る老人、はしゃいでいる子供、それを制する親…
近くの、白いフードを被った男が一人、窓口に近づく。そして、おもむろに鞄から拳銃を取り出し、「おい、金を出せ！」と叫び、銀行員に銃口を向ける。
店内は一瞬、水を打ったようにぴしゃりと静まり返った。皆が皆状況を理解したとき、悲鳴が響いた。
黙れ、動いたら、ぶっ殺す！などと喚いて、冷静さを失っている男の死角に私はすっと入り込み、拳銃を掴み落とす。
「あ？」と、男が私を見る。右手がふと軽くなって、不思議だったようだ。それとほぼ同時に私は男の膝裏を蹴りバランスを崩して押し倒し、背中から馬乗りになって押さえ込む。そして左脇から拳銃を抜いて、頭に突き付ける。相手は、それで観念したようだった。外の相方もハツシロさんによって取り押さえられたようだった。銀行強盗二人は、一人の被害者を出す事無く御用となった。

署に戻ると、ランバート署長にその事を褒めていただいた。私は、いえ、ハツシロ刑事の判断が正しかったのです、と、彼を持ち上げた。事実、そうだと思う。
「ところで、ハツシロ。相談なんだが…」署長が言う。
はぁ、と彼は生返事をする。昔からの仲の二人は、目でそれぞれを見遣る。

「実は、新人が一人着任しててな。お前に教育を任せたい。」
「…なるほど、了解しました。」
頼むぞ、と署長は立ち上がり、彼の肩を叩く。
彼が署長室を出るとき、私はチラと彼を見て、軽く会釈をした。
それに気付いて、彼は少し口元を緩め、部屋を後にした。
ハツシロさんは、私が刑事になって初めて組んだ人だ。
まだなりたてで、右も左も分からなかった私に刑事としてのイロハを叩き込んでくれたのだった。
それと、彼の深い皺は、私に師匠の事を思い出させる。
…あとで、きちんとお礼を言っておこう。
「あ。そういえば、署長。私のパートナーは、どうなるのでしょう。」
「それはもう手配済みだ。おい、入ってくれ。」
扉がガチャリと音を立てて、私は振り返る。居たのは、ギルだった。

＊

アップルパイはかなり量が多く、食べきれない程だった。残しておいて、あとでお姉ちゃんと一緒に食べることにした。
…何も言わずに食べてもらって、「ハンナさんが作ったんだよ」と言ったら、一体どんな顔をするだろうか。
それを想像して、うふふ、と声が出た。
…私が笑った？本当に、今のは私の声？
「何だか、楽しそうだね。」
二人だけのお茶会はまだ続いていた。私は紅茶、ハンナさんはコーヒーを。
私はハンナさんをチラチラと気にしながら、一気に飲んでしまわないよう気を付けて、紅茶を飲んだ。
そういえば、ハンナさんはいつも、コーヒーを飲んでいるような気がする。

どんな味がするのだろう。良い香りだとは思うけれど。
「アノ、ハンナサン。こーひーッテ、ドンナ味ガスルンデスカ？」
「ん…飲んだ事無いの？」
「ハイ。エト…私ハ普段ハ、紅茶デスカラ…」いぎりす人ナノデ、と付け加えた。
「飲んでみる？」おれが口つけたので良いなら、とカップを渡してくれた。
「ア…ハイ。イタダキマス。」カップを受け取り、両手で持って口に近付ける。すぅっと、香りが広がる。
…え、苦い！砂糖、砂糖は、入ってないの？と、半泣きになっていると、
「あぁ、ごめんごめん！俺普段、砂糖もミルクも入れないから…」
ハンナさんは本当にあたふたとしていて、私はそれがちょっと可笑しくて、コーヒーの苦さも忘れて「信ジラレマセン！」と、少し大袈裟に言った。

＊

気まずいなぁ、年の近い男の人と同じ空間に居る事が。巡回中の覆面パトカーの中で、私は思った。
今までは父さんや師匠、ハツシロさんといった、年上の男性と一緒に居る事が多かったから、
ギルのように私の一つ上程度といったの年の差は、慣れなくて居心地が悪い。いまいち何を話したらいいのかよく分からない。
とりあえず、何か会話をしなければ。仕事の話でも、何でもいい。
「ギルは、警官になって、何年だっけ？」
「高校出てすぐだから、６年目だな。」
「ふうん…。」
また、沈黙。対向車が速い。ああどうして、私ってこんなに口下手なんだろう。スーは、私が聞き役に徹していても、勝手に話をして

くれるから良いのだけれど。
ギルは運転に徹している。私は手持無沙汰に、話題を探すのに腐心していた。
何か、話題。話す事柄。身の上話？それとも思い出話？どちらも、気が進まない。というか、そんなものは私には無い。
共通の話題？仕事とか…あ、そうだ。
「あ、あのさ、その…私とギルは、私が警察になる前からの付き合いだったよね？」
「だったか？」
う、これはこのまま会話が途切れるパターンだ。なんとか持たせないと。
「そうだよ。私、ロシアから越してきてすぐ、拳銃を買いにお店に行ったの。そしたら、ギルが居て。私はロングコートを着てたと思う。」
治安が悪かったら、自分たちの身は守らないといけない、と思ったからだった。
結局、そんなに心配するほどでも無かったけれど。むしろ、モスクワの外れよりは大分ましだった。
無駄に不安にさせる事はしたくなくて、アリスには何も言わなかった。
「ああ、思い出した。確かにお前ロングコート着てたな。旧ソビエト軍の。」
…旧ソビエト軍のかは知らないけれど、ともかく私は返事をした。
「あの時はな、親父もお袋も一緒に出掛けててな、俺がたまたま居たんだ。そう、そう。」
あの時の様子を、私はよく覚えている。

「すみません、拳銃を欲しいのですが。」
「どんなやつかな？」私に対してギルは、子供の相手をするみたいに接した。

確かにその時には、既にギルは警官の職を得て自立していて、私は明日をも知れぬ身だった。大人と、子供だった。
「・３８口径で、安くて、精度の良いもの…ありますか？」
「女性なら、・２２口径とか、・３２口径の方が扱いやすいんじゃないかな。」
「ううん…でも、何となくその辺りって、頼り無くありませんか？かといって、・４０口径や・４５口径は、少しキツいですし…」
　師匠、ヴァシリ・オホートニカヴィッチから教わったのは、主に猟銃であるモシン・ナガン小銃の扱い方であったけれど、その他にも様々な武器兵器の扱いも教わっていた。もちろん、弾丸の種類も。彼は元軍人で、高名な狙撃兵だったそうだ。倉庫には、大戦の時に使用していたという狙撃銃や、トカレフ拳銃など、様々な銃器が息をひそめて並んでいた。
「まぁ、そうだね。」彼が意外そうに言ったのを覚えている。そう言って、二挺の拳銃を取り出す。
「このどっちかだったら、条件は満たしてるんじゃないかな。」
私はそれらを見比べる。片方は曲線を主とした、銃身の露出した優美なデザインで、鉄の重さと冷たさを感じさせた。
けれど、それを携帯するには少し重たいと感じた。それに、何となく軟そうで不安だ。
もう一方はプラスチックのような、直線で構成され、引鉄には安全装置が組み込まれている、おもちゃっぽい雰囲気の拳銃だった。
撃鉄が露出していないのは、個人的に気に入らなかった。自分で操作できない不安がある。
それに、その引鉄以外に安全装置らしきものが見当たらなかったのも、なんとなく気がかりだった。
アリスが不意に触って、暴発でもしたらどうしよう。そんな不安が常にあった。
　安全な事と、携帯に優れる事とを彼に言うと、それならとわざわざ奥から別のものを持ってきてくれた。

ステンレスと思われる銀色の遊底に、短めでずんぐりとした印象を与える拳銃で、側面には「Ｒｕｇｅｒ　Ｐ９５」と彫られていた。遊底の引き具合や銃身のガタ、引鉄の重さなどを一通り確かめていると、「慣れてるね。」と言われた。
「えぇ、まぁ。」私は控えめに肯定した。
「あの、これ、試射させてもらっても、良いでしょうか。」

「お前、射撃のセンスあるよなぁ。隣で見ていて、すげぇなぁ、って思ってたよ。」
確かその時は、的にきれいな五角形を作った覚えがある。
「…あの時は、色々と注文付けて、ごめんね。でも、凄く気に入っているの。９５って数字も。
　えっと、妹の、アリスの誕生日が９月５日でね。だから、何となく親しみがわいたのもあって…」
ふぅん、という彼の返事に私は少したじろいだ。この、口下手。
「そういや、お前の誕生日はいつなんだ？」
「私？」
いつだったろうか。アリスの誕生日は、はっきり覚えているのに。
「確か…５月。５月の、１７…いや多分、１４…うん。５月１４日、かな。」
「５月か。じゃ、パーティーを開くとしたら、来年だな。」
「え？いやいや、いいよ、わざわざ私の為に…」
もうそんな年でも無いし。と言ったものの、内心ちょっと嬉しかった。

＊

7話

ＶＩＩ

プルルルル、と電話が鳴る。その音で目が覚める。
「はいもしもし」眠たい声で応える。俺はいつだって眠たい。
『アノ…ハンナサン、デスカ？』あの自信無げな声だ。電話を使う事も珍しいのだろう。
「その可愛い片言英語の声の主は、アリスちゃんかな？」ちょっとふざけて、そう言う。
『エ？！イヤ、アノ、ソノ…』電話越しでも赤面しているのが伝わってきそうだ。
『エット…コノ間ノ、買イ物ニ行クッテ話デス…』
「準備できた？」
思ったよりも力強い声で言う。
『ハイ。』

アリスちゃんは、やっぱりいつものブラウスに、ジャンパースカートだった。少し照れながら、ぺこり、とお辞儀をする。いつも思うのだけれど、この服の組み合わせは日本の女子学生の制服みたいだ。それも、一昔前の。最近はセーラー服すらも減少傾向にあって、ブレザーが主流なんだスよねぇ…などと、シェーラが言っていたと思う。
「ア」
「何？」
「何ダカ、”ハンナサン”ッテ感ジデス。」怪訝な俺の表情を察してか、慌てて付け足す。
「エトアノ、初メテ会ッタ時、ハンナサン、ソノ格好デシタ。」
「そうだっけ？」

ソウデスヨ。と、少し不服そうに言った。確かに、あったこと全部を事細かに覚えていそうだ。

人通りは少ない。平日な事もあるのだろう。バイトは、アルに頼んで休みにしてもらった。

「いつ休んでくれても構わないぞ。給料を払わなくて済むから、逆に助かる。」とアルは言っていたけれど、本当のところ、そうは思っていない事を、俺はちゃんと分かっている。

「アリスちゃんさ」

「ハイ」

「お金、持ってきた？」

「オ姉チャンガ、チョット持タセテクレマシタ。」

と、紙を一枚、ブラウスのポケットから取り出して、俺に渡す。

…１０桁の数字と俺の名前？

「あ、わ、違、ソレジャナイデス」

返シテ下サイ、と手を伸ばしたり、跳ねたりするけど、身体が小さいうえに、俺がその紙を高く掲げているものだから、届かない。

「いじわるシナイデ下サイ…」息を切らしながら言う。

ごめんごめんと返す。アリスちゃんはその紙を受け取ると、丁重に折り畳んで元の場所にしまい、代わりに一枚の紙幣を渡す。

「いくらナノカハ、ヨク分カラナイデスケド。」

１００ドル札。日本円でいうところの、一万円札。結構、羽振りが良い。何となく、お年玉に貰うお金の様な印象だ。

すると心配そうに、アリスちゃんがこちらを覗き込んでいる。

「アノ…ソレデ、オ洋服、買エマスカ？」

充分、充分。全然足りるよ。と言うと、いくらかほっとした様子だった。

洋服店に着く。中は広く、端から端までをくまなく回るだけで一

日が終わってしまいそうだった。
中は暖房が効いていて温かく、俺は帽子とマフラー、手袋を脱いで鞄にしまった。
普段はここで、メンズの方に行くんだけど。今日は何せ、メインはアリスちゃんだから。
そのメインに目をやると、あ然とした表情をして固まっていた。こういうところに来た事が無いのだろうか、一心に、何かを見ていた。
「もしもーし？」呼びかけられて、ようやくはっと気付く。俺はニヤリと笑う。
「さ、行こっか。」と、俺は左手を差し出す。おずおずと、アリスちゃんは右手で握る。
二人並んで、アリスとハンナで歩き出す。

「アリスちゃんは、やっぱりスカートが好きなの？」
「スキ…トイウカ、コレシカ持ッテナインデス。」
それは前にも聞いた。でもまぁ、もう少し短くても可愛いと思うんだけどなぁ…。
今は、ちょうど膝下くらいだもの。そのせいで、余計に女生徒らしく見える。
「あ、ほら。こういうの、良いんじゃない？」
俺が手に取ったのは、明るい水色の、半袖のワンピース。
白いエプロンと組み合わせれば、まんま『アリス』な服。
「チョット、色ガキツイデス…」と、好みに合わない様子だ。そうかなぁ、似合いそうだけれど。
…でも、よくよく考えてみると、普段から男っぽい、というより中性的、ユニセックスな服装を好む俺は、
可愛い女の子の服を選ぶのには適していないのかもしれない。
大体、流行にも疎い方だし。携帯電話だって最近になってようやく持ち始めた。未だにワープロとパソコンの違いが分からない。
最近のファッションは、何だろう？ルーズソックスとか？て、それ

は日本か。
「じゃあちょっと思い切って、ジーンズとか。」
「じーんず？」
「俺が今履いてるようなやつ。」
と、ズボンを引っ張ってみせる。
「うぅん…デモ…」と、もじもじしている。結構、おしゃれさんなんだな。言いかえれば、頑固なんだろう。
「でも、若いんだから。冒険、冒険。」
と、ハンガーにかかっている服を、手当たり次第に見せてみる。
「こういうのはどうかなぁ。」横からニョキっと手が生えてきて、
「んにゃ、むすろアリスちゃんさばこっただ風なのが…」
うわぁビックリした。訛りで分かったけれど、やっぱりシェーラだった。
「え、今日、大学じゃないの？」
「おらは今日は午前中は休みだス。」
「あ、そう…」
しかし何にせよ、シェーラが居るのは心強い。
シェーラのファッションには垢ぬけたセンスがあると思うし、日本のサブカルチャーにも詳しいだろうから、
いわゆる『女の子』な、可愛い服も簡単にコーディネートしてくれるだろうと思ったからだ。
シェーラは快く引き受けてくれた。
「めごい童ッコさば、めごい服ッコ着せたがべ、ふつー。」
『めごい』はスコットランドの方言で『可愛い』の意だとクレアから聞いていた。
まぁ、方言は嫌いじゃないけど。でも、ちょっと聞き取りづらいし、分かりづらい。
この間も、シェーラがアルバイトしている喫茶店に行ったとき、普段は標準語でお客さんと接してるらしいのに、
俺やクレアには普通に方言で話しかけたがるものだから、そこの店

長さんに注意されていた。
シェーラも反論していた。自然体で接するのが友達なのだ、と。クレアもそれに賛同した。
そうかもしれないけれど、標準語は個人語でなく社会語なんだと割り切らなきゃいけないんじゃないかな、と俺は思った。
一度、クレアとその辺りを議論した事がある。その、お茶の席で。

「英語って、そんなに必要かしら？」
「共通語としての？」
クレアは、この問題に対しては主にそういった疑問を持っている事はよく知っていた。
「そう。だって、歴史を考えてみてよ。この国だって、元々は別の言語、つまり文化があった訳で、
それをヨーロッパ人が侵略して、滅ぼして、英語が広まったわけでしょ？」
と言って、ショートケーキを刺していたフォークを抜き、くるくると回した。
「詰まりさ、ここは移民の国で、何も英語ばかりが共通語では無い訳で。それなのに、英語が台頭してるってのは、可笑しな話じゃない？」
クレアは、クリームと砂糖のたっぷり入った、甘ったるい紅茶を一口飲む。こいつは、英語崇拝主義が嫌いなのだ。
「でも、」
大きな目が俺を見る。俺はニヤリとして言った。
「英語が無かったら、クレアとも話が出来ないじゃん。」
「ん…まぁ、ね。」
俺がわざと論点を外しているのにちょっと微笑んでか、カップを口に近付けた。

「ホセアさん、おら今ちょっと試着させで来るへぇで。」

あべ、アリスちゃん。と、カーテンを閉めた。
…あれ？俺も一応女なのに、なんで入らなかったんだろう。

カーテンの外で、くるくる回るネックレスの台なんかを回転させて遊んで待っていたけれど、あんまり長いと思ったので、カーテンを開けて入ると、アリスちゃんは白いワンピースを着て、顔を真っ赤にしていた。苺のショートケーキみたいに。
「ハンナサン！」助けを乞うような声だ。
「コノ…すかーと、短イ、デスヨネ？」見ると、膝上で、太腿の半分くらいが見えているくらいの丈だ。
「良いじゃん。可愛いよ。」
信じられないといった表情で俺を見た。
「ほがのば膝ッコぐれぇの丈なんだけんども、それば良いって言うんだども。これば、短がすぎると。めごいのサ。」
「…あれ、そういや今日は、クレアと一緒じゃないんだ。」
「ん？クレアは今日は、ヘンリ兄ちゃと両親さ会いさ行ぐど。久々に空港さ寄れるってんで、大学ば休んで行ったのス。」
へぇ、そうだったんだ。ていうか、俺に知らせないんだ、そういう事。まぁ、メールの開き方とか、まだよく分からないんだけど。
と、アリスちゃんが、俺のパーカーの裾を引っ張って、上目遣いで俺に訴える。
「…短イデスヨネ？」
「全ッ然短くなんかないよ。」
それで観念したようだった。

会計を済ませて（１００ドル以内に収めて）、お釣りの５ドルと持ち合わせを合わせて、お茶をする事にした。
紙袋を抱えて、最寄りの喫茶店に入る。俺はコーヒー、アリスちゃんは紅茶、シェーラはホットのレモンティーを頼み、その他にスコーンと、クッキーを一皿ずつ頼んだ。軽い昼食も兼ねて。シェーラ

は、
「おらほのよ、グラスゴーのほうではよ、皆すてミルクティーばり飲んでヨ、…ま、妹のベッキーはコーヒーなんだども、
とにがく、何して、んがぁレモンティー飲むのや、それもぬぐいのをよ。
レモンティーは氷ッコ入れて、夏さ飲むのが普通だしょ、って。
そんなん、おらの勝手だしょ。別に皆さ合わせる必要は、ネ。」
と、レモンティーへのこだわりを愚痴っていた。
「アリスちゃん、んが、レモン？ミルク？」
「エ…？私、特ニ気ニシテナイデス。すとれーとガ、多イデスケド。」
あ、そう。と、そのレモンティーを一口飲んだ。
「でも、こだわりがあるのはいい事だと思うよ。そういう細かいところ一つひとつが、
人それぞれのアイデンティティを生むんじゃないかな。」
二人とも、ふむふむといったように頷いた。大した事を言った訳じゃないけど、何となくそれが誇らしかった。

午後から授業のあるシェーラとはそこで別れて、お代わりをしながら、昼ぐらいまで二人で居座った。
アリスちゃんは、とりとめの無い話を俺としながら、紙袋をチラチラと気にしていて、話が途切れたりすると、中を覗いたりしていた。
「良い服、買えた？」
アリスちゃんは、さっきの白のワンピースから普段の服に着替えていた。はたとこちらを向いて、言う。
「ハイ。大体ハ、可愛クテ、私ガ着ルニハ勿体無イクライデ…」
そんなことないよ、と俺は言った。
「デモ…最後ノわんぴーすハ、ヤッパリ短イト思イマス…」
そんなことないよ、と俺は繰り返した。
その後、二人で協力して、買った服をアリスちゃんの家に運んだ。

寝室にクローゼットがあるそうなので、入らせてもらった。やはり居間と同じく、時計とカレンダーがある程度だ。ベッドはドアを挟んで二つあり、入って左側の窓のある方がアリスちゃんが、右側の壁の方がイリスさんのだそうだ。
買ってきた服を、ひとつひとつ確かめて、クローゼットにしまう。ほとんどはセーターとか、カーディガンやスカートだったけれど、他にもいくつかジーンズやスラックスも買ったようだ。
一つひとつの服について感想を述べながらだったからか、全部をクローゼットにしまい終わる頃には、もう夕方だった。
「じゃ、またね。」と俺が帰ろうとすると、アリスちゃんは、俺の手を握って、引きとめた。
「アノ…ハンナサン。」
アリスちゃんの鼓動が、手のひらを通して伝わってくるようだった。彼女は、俺の目を見て言った。
「ハンナサン。今日ハ、凄ク楽シカッタデス。」
そして恥ずかしさでうつむく。俺は笑って言う。
「ありがと。俺も、楽しかったよ。」

家に着いて、ドアノブをひねる。ん？カギが開いている。確かに閉めたはず。
そっとドアを開けて、靴を脱いで、スリッパに履きかえる。奥から話し声がする。
二人、居るようだ。クレアの声？あいつは俺の家の合鍵を持っているから。でも、もう一人は誰？
居間に入って、その人が誰か分かると、俺は驚く他無かった。
「櫻子？」信じられず、声が漏れた。
「あ、ハンちゃん！おかえりー。」
クレアも、「おかえりー。」と、日本語で。こいつは一体何ヶ国語話せるんだ。

「え、櫻子、なんで？」
「何でって、飛行機でやけど？」
「そーじゃなくて。どうして？」
「そりゃあウチ、ハンちゃんに会いとうて来たんよ。それに、ハンちゃんが言うてはった、
友達のくーちゃんとかれーちゃんとか、どないな人か、見たかったもん。」
「でも、英語とか…」
「あ、それは私。」とクレアが手をあげた。
「お兄ちゃんと両親に会った後、たまたま和服の人を見かけて、『あッ日本人だ』と思って、私近付いていったの。話をしたくて。」
「そそ。くーちゃん日本語上手やったから、ウチ助かったわー。」
『くーちゃん』がクレアで、『れーちゃん』が恐らくシェーラの事を指しているのだと気付いた。
「ああ、そう…」
と、素っ気なく返事をしたが、ふつふつと喜びが湧き上がって来た。
「え、嬉しいな。わざわざ、来てくれたんだ。」
「うん。ハンちゃんの誕生日までは、泊まってくつもりやからね。」
…へ？俺の誕生日が１月１９日で、今は１１月だから…あの、二ヶ月近くあるんですけど…

8話

ＶＩＩＩ

とんとんとん、という包丁の音と、ぐつぐつと煮えている味噌汁の匂いで目が覚める。台所の櫻子がこちらを向いて言う。
「あ、起きた？今ごはん出来るさかい、待っててや。」
まだ半分眠りながら、黙って食卓につく。しばらくして、櫻子がご飯をお盆に載せて、運んでくる。
「ご飯と、お味噌汁と、沢庵と、塩焼き秋刀魚。」
俺は箸をとって両手を合わせて、
「頂きます。」と、軽くお辞儀をする。
「召し上がれ。」櫻子は手を握ったままで、まだ箸を付けようとしない。
まず沢庵をとって、ポリポリと食べる。
「どない？」すかさず、櫻子が聞く。
「美味しいよ。」
「良かった。それ、ウチが漬けたんよ。」
「へぇ…凄いなぁ。」
えへへへ、と楽しそうに、櫻子も味噌汁をすする。
京都に遊びに行った時は、大体こんな感じだった。それが、アメリカのど真ん中でも同じように繰り返されるとは、思わなんだ。

昨日はあの後、三人で話しあった。つまり、全く英語の分からない櫻子が、どうやってアメリカで生活するか、をだ。
「やっぱり最低限の会話は出来た方が良いよ。万一に備えて。」
「そうかしら？日本語を解すグループ、つまりハンナとか私とか、に所属している限り、大丈夫だと思うけれど。」
ちなみに日本語での議論だったので、櫻子も参加する。

「ウチも流石に、ちぃとは分かるよ。イエスが『そや』で、ノーが『あかん』やろ？」
「うん、それだけ分かれば充分だって。」
「いや、そんな事ないから！」
クレアだって、どの程度言語を理解していなければ会話が出来ないかくらいは、分かるはずなのに。浮かれてんのか？
「だからぁ、サクラコが私かハンナとずっと一緒に居れば、大丈夫だって！」
ね？と念を押される。櫻子もうんうんと頷く。結局、俺が折れた。

＊

「でもさぁ…」
私はハンナの言葉を、一字もこぼさないようにと、近付く。
「アメリカだと、和服って凄く目立つんじゃないかなぁ…」
私はきょとんとして言った。
「何だ。今更そんなこと？」
「まあ、さぁ…」
と、サクラコの方をチラと見る。私は少しムッとした。
「良いじゃない、和服。だって、サクラコは日本人なんだもん。」
「恥ずかしくない？」
「何が？」サクラコは目を大きくして言った。しばらく、時計の音だけ響く。ハンナは、いつも着けている手首飾りを弄っている。
「まぁ、櫻子がいいなら、いいんだけど。」
ハンナは再び観念したのであった。

その次の日、つまり今日の、大学の休み時間。
シェーラは少し退屈そうな顔をして、日本語の辞書をパラパラとめくっている。
「シェーラ、ちょっと良い？」

ん、と目をこちらに向ける。
「実は、昨日日本からね、ハンナの従妹が遊びに来たのよ。名前はサクラコ・ハルノ。」
ふむふむ、それで？といったふうに、うなずく。
「でさ、シェーラ、キモノ着たいって言ってたじゃん。」そう言うと、
「うん。着たい着たい。」と、食いついてきた。
「サクラコがね、『良かったら、キモノは他にも持って来たから、キツケしてあげましょうか？』って、誘ってくれたんだけど。
今度の土曜日、良かったら一緒に行かない？」
「うん。行ぐ行ぐ。バイト休んででも行ぐ。」

＊

何故だか興奮して、朝早くに目が覚めてしまった。隣のベッドでは、お姉ちゃんがまだ眠っている。
起こさないよう、私は細心の注意を払ってベッドから起きだして、クローゼットを開く。
昨日買った服を、ひとつ、ふたつと取り出す。
濃い紺の、長袖のカーディガン。と、濃緑を基調とした、チェック柄のプリーツスカート。
シェーラさんの一押しだったものだ。普段のブラウスと合わせたら、良いのかな。
いつものジャンパースカート以外の服装をした事が無いから、よく分からない。
「それ、昨日買った服？」
振り返ると、まだ半分とろんとしているお姉ちゃんが、起きだしていた。
「うん。…あ、お姉ちゃんのパジャマも、買ってくれば良かった。」
「え、別に、要らないって、うん。別に恥ずかしくないし、何より

楽だし。」
見ている私が恥ずかしいのだ。上はタンクトップ、下は下着のままで寝ているなんて。
「そんな事よりもさ、その服、可愛いね。ちょっと、着てみてよ。」
言われるままに、着替える。パジャマを脱いで、いつものブラウスに袖を通す。
スカートを履こうとすると、何だかごわごわしていて、ちょっと違和感がある。
腰の所は、少しきつめにベルトで締めあげる。
カーディガンを羽織って、いつものリボンを結び、前のボタンを留める。
「うん、凄く似合ってるよ。」
　すると思い付いたように、タンスや、小物入れなどを探しまわり、水色のカチューシャを取り出して、私の頭に付ける。
「母さんのカチューシャだよ。」
ほら、自分で見てみて。と、クローゼットの扉の裏側に付いている鏡の前に、私を立たせる。
普段はいつも猫背で余計に小さく見える私も、ベルトで締めあげたせいか、少しだけぴんとして見える。
鏡の中のお姉ちゃんは納得したように繰り返す。
「良いね、良いね。そうだ。時間も丁度いいし、今からちょっと、一緒に散歩しに行こっか。」

　お姉ちゃんは、日替わりのセーター（今日はタートルネックだ）、スラックスに、見慣れたベージュのジャケットに着替えた。
お姉ちゃんこそ、もっとオシャレすれば良いのに。化粧だって、一度もしていない。
普段から歩くのは遅いし、着慣れない服なのも手伝って、とてもゆっくりな散歩だったけれど、それでも、いつものように私に合わせてくれた。

「ねぇ、アリス。」
「なぁに、お姉ちゃん。」
私は立ち止まって、お姉ちゃんの顔を見る。優しくて、包容力があって、整っている。私とは、違って。
「ハンナさんと居ると、楽しい？」
そう聞かれると、私はためらわずに「うん。」と答えていた。
「昨日も、凄く楽しかったの。洋服を買うなんて初めての事だったけど、こんなに可愛い服も選んでくれて。
その後一緒に、お茶をして、クローゼットに服を入れながら、一々話しかけてくれて…」
お姉ちゃんは頷きながら聞いてくれている。すると、急にまた不安が私を襲った。
「…でも、『友達』、なのかな。本だと、例えば学校の級友で、同い年の人を『友達』って書いているふうで…」
私は、自信が無かった。ハンナさんが、私を『友達』として見てくれているのか、それとも『年下の子』なのか。
「ハンナさん、凄く優しくしてくれるよ。一緒に笑ったり、お茶も何度もしたし、ハンナさんも『楽しい』って。
でも、まだ『友達』って言ってもらった事、一度も無い。」
自然と、涙が出ていた。ハンナさんが私に飽きて、どこかに行ってしまうかもという不安に？
それとも、ただ自分が可哀想で、可愛くて？
「お姉ちゃん、教えて。友達って、一体何なの？どうすれば、出来るの？」
ケホ、と自分の涙で少しむせる。しんと張りつめた空気の中で、家は、草木は、死んだように静まり返っている。
「アリス」お姉ちゃんが厳かに口を開く。
「私とアリスとは、姉妹だよね。」
うん、と私は頷く。
「そう。それは、神様がそうして下さったの。イリスとアリスは、

姉妹として生まれるように、って。
いつの間にか…というより、元々、そうなっていたのよ。ハンナさんも同じ。
私とアリスが自然と姉妹であるように、ハンナさんとアリスも、自然と、いつの間にか友達になっているのよ。」
ふふっ、とお姉ちゃんは笑って、
「ほら、涙を拭いて！折角の可愛い服が、台無しよ？」
と、言った。

そうして、太陽は昇って来た。
私はいつものようにシャワーを浴びて、いつもの服に着替え、一緒に軽い朝ごはんを食べ、紅茶を飲み、
珍しく遅く出勤したお姉ちゃんを見送り、そして、私は外に出た。

＊

周りの視線を集めているのは櫻子だ。ただ単に、アルのパン屋まで行くだけなのに。付いて行きたいって言うから。
酷いのになると、握手を求められたり、写真まで撮られていた。
それに対して櫻子は、嫌な表情を一つも見せずに、関西の人間らしく気さくに対応していた。
その姿が少し、父さんとダブった。
…まぁ、櫻子が良いなら、良いんだけど…。
と、前から見覚えのある子。昨日一緒にクローゼットにしまった、可愛い服を着て。
「似合ってるよ、アリスちゃん。」
俺はうへへとにやついた。アリスちゃんは、ちょっとかしこまって言った。
「ハンナサン。エト…」
口がぱくぱくと動いたようだったけれど、それは言葉にはならず、

別のものが口をついて出てきた様子だった。
「…ソノ、変ワッタ服…ヲ、着テイルノハ、ドナタ、デスカ？」
やっぱり、変わってるよなぁ。
「この人は、春野櫻子。苗字がハルノで、名前がサクラコね。…日本だと、苗字と名前が順序逆だからね。
　でも、俺の従妹なんだ。」
「イトコ…？」とアリスちゃんが悩んでいると同時に、櫻子が俺に聞く。
「ね、ね、ハンちゃん。この子は、何ていいはるの？お友達？」
「Ｓｈｅ' ｓ…じゃなくて、この子はアリスちゃん。うん、俺の友達。」
「へぇ、アリスちゃん、てゆうんかぁ…じゃ、あっちゃんやね。」
あっちゃんあっちゃん、と呼びかけながら近付く。
「ウチは春野櫻子いいますー。どうぞよろしゅうお願い致しますー。」
…て、日本語で言っても通じる訳は無く、俺が間に入った。普段のクレアのポジションだな。
「アノ、イトコッテ、ナンデスカ？」
「親戚って言えば分かるかな？イトコっていうのは親の兄弟姉妹の子供の事で…。」
説明が進んでいく毎にアリスちゃんの首が傾いていったので、
「まぁ、家族、キョウダイのようなものだよ。」
「…ヨウナモノ。」
納得がいかないようだったけれど、納得したようだった。
　次いで櫻子が質問する。
「あっちゃんは、アメリカ人なん？」俺は訳す。
「エエト…父サンガろしあ人デ、母サンガいんぐらんど人デ、デモあめりか生マレデス。」
へぇ、それは初耳だ。…聞かなかったんだから、当たり前か。
「イングランドって、アメリカの州？」

ちゃうちゃう、イギリスの事だよ。スコットランドの南。
「あ、そーいえば、日本にもあっちゃん居るよ。」
は？と俺は問い返す。
「ほら、会ったって言うてたやん。あの、本屋で働いとる。」
ああ、あの子か。確か、椎名麻美。何となく、アリスちゃんに似ている。
「何ノ話デスカ…？」
「日本にね、アリスちゃんみたいな人が居たなぁって話。」
「私ニ…？」首が傾く。
「あ、ほら、意外とイトコだったりして。」
それは無いだろうと、自分の中で突っ込んだ。けど、アリスちゃんはちょっと、楽しそうだ。

アルは二人の来客をあまり気にしていない様子だ。椅子をどこからか引っ張り出してきて、三人で座る。
まぁ、普段から俺の仕事ぶりも、あまり気にしてないけど。
クッキーをひと袋、レジの横から取る。「給料から引いとくぞ。」
そういうところは、気にする。
「これ、俺が作ったんだ。」
櫻子に渡す。すると、アリスちゃんが口を挟む。
「ア、コレ、凄ク美味シイデス！」
「何て言うてはるの？」
少し照れながら、「いやぁ、美味しいってさ、それも凄く、って。」と言う。
そうして、三人でそのクッキーをつまみながら、話をして、盛り上がる。
幸せっていうのは、こういうものなんだろうなぁ。

＊

ハツシロさんの班が、麻薬組織の下っ端を捕えた。どうやらロシア人らしく、尋問では私が通訳を務めた。
それによると、近々どこかで取引が行われるらしい。それ以上の事は分からなかったが、署長から、皆警戒しておくように言われた。
私は、緊張した。もしかしたら、撃ち合いになるかもしれない。銃を持ってはいるが、人を撃った経験は無い。ただ相手を降伏させる為の、説得の手段として用いただけだ。…私に、ちゃんと出来るだろうか。
「ギルは、人を撃った事、ある？」
パトロール中の車の中で、聞いた。
「ああ。」
彼はそれだけ言って、運転を続けた。彼はただ黙って遠くを見ていた。
これ以上は聞けない。その権利は無い。私にも、聞かれたくない事はあるから。
私は拳銃を抜いて、沈黙の中で、弾丸が装填されているかを確かめた。

9話

ＩＸ

雨の降りそうな日だった。朝から曇っていて、暗い雲がそのまま降ってきそうだった。
ギルと私は、路地に入って行く　――　ケースを抱えた　――　二人連れを見つけ、応援を呼んでおき、車から降りた。
が、道を間違えたのか知らないが、その二人が戻って来た。車の前で立ち止まり、地図を取り出しながら、
あっちでもないこっちでもないといったふうに、迷いながらうろうろしていた。何というか、間抜けな悪党だ。
片方が、あっちだ、あっち。という感じで、私たちの方向を向き、二人で近付いてくる。あ、どうしよう。
「カップルの振りをしろ。」ギルが指示する。
「へ？」
「やり過ごす為だ。親子には、見えないだろ。」と、右手を差し出す。
私は、左手でギルの手を握る。そして思う。…黙って歩くカップルって、居るのか？
「あ、あー。私、子供欲しいなぁ。それから、ギルとその子と三人でね、
　ずっと一緒に暮らしていけたらいいなぁ。」
隣でギルが大きく咳払いをして、「そ、そうだな。」と、相槌をいれた。
二人は通り過ぎるとき、私の顔をチラと見た。やっぱり、不自然だったか？
　少し距離がついてから、
「何だよ、さっきのセリフは！」と、小声で言われる。

「だって、黙ってるのも変かなって…でも、ごめん。気付かれたかも。二人とも、私の顔見てたし…」
「そりゃ、お前が美人だからだよ。男なら誰だって綺麗な女は好きさ。そんな事より、追うぞ。」
私が疑問符を挟む暇も無く、ギルは二人を追いに走った。

私は左脇から、ギルは背中からそれぞれ拳銃を抜いた。
ギルは左利きで、Ｇ１７拳銃を愛用している。私はＫＰ９５拳銃の安全装置を外し、薬室に装填されているかを、再度確認する。
路地の突当たりのような場所で、取引が始まろうとしていた。
「応援はまだか…」ギルが呟く。
それぞれの代表が近付き、スーツケースを交換する。
それを合図に、ギルは私に目で合図をし、同時に飛び出す。
「動くな！」一瞬、空気が固まる。その次の瞬間、発砲音が轟く。
私はとっさに壁に身を隠す。
相手は、５人。スーツケースは、２つ。こっちは二人。
私とギルは、威嚇の意味で、時たま思い出したように発砲し、相手もそれに合わせ撃ち返してくる。
警察の仕事は猟とは違い、殺すことではない。たとえ犯罪者であっても、あくまで人命が優先だ。
１６発を撃ち切り、遊底が後退した状態で止まる。弾倉を交換する。
１５発。膠着状態が続いている。
出口は私たちの側にあるので、彼らも逃げられない。どうして、ここで取引しようと思ったんだろう。
と、横から物音。男が、右手に拳銃を握り締め、私に向けようとしている。
時間が非常にゆっくり流れているように感じる。反射的に男に銃口を向け、引鉄を、いつものように２回引く。
ばん、ばん。
火花が出て、腕に振動が伝わり、空の薬莢が排出される。

一発は、男の膝を撃ち抜き、もう一発は、ちょうど倒れ込んできた男の頭を吹き飛ばした。
その、頭から盛大に赤い血を噴き出している男の銃の引鉄に最期の力がぐっと加わり、ぱんと銃が作動する。
それは私の左脇腹に小さな穴を開けた。私は倒れた。
人を殺した。じんわりと腹から血が流れ始めた事よりも、その事についてのショックの方が、ずっと大きかった。
私は、人を殺した。
「イリス！」ギルが叫ぶ。あぁ、ごめん、ギル。それでも、どんどん血は抜けていく。
右を見ると、私の拳銃が転がっている。Ｐ９５という、アリスの誕生日９月５日と同じ数字が刻まれた銃。
あぁ、ごめん、アリス。こんなお姉ちゃんで、ごめん。服は私の血を吸って、どんどん重たくなる。
いや、私が軽くなっているのか？分からない。寒くて、凍えそうだ。ポツリ、ポツリと冬の雨がようやく降り出す。
あぁ、私が殺した動物たちも、こんな思いで死んでいったのだろうか。孤独で、寒くて、怖くて、淋しくて…
遠くで、それとも近くでパトカーのパトランプの音がする。どたどたという、地面の振動。
ギルが駆け寄って来て、叫ぶ。「イリス！」

「イリス！」赤く濁った眼で、父さんは叫ぶ。
「手前、金持ってんなら、隠してんじゃねえよ。」
鼻を赤くして、アルコールの匂いをさせながら、父さんは言う。
「何よ、いつも飲んでばかりで、この甲斐性無し！誰のお金だと思ってるの？」
アリスは、手で顔を覆って泣いている。父さんの顔に怒りの表情が湧き上がってくる。
「親に向かって、その口の聞き方ァ何だ！」

と、持っていたウォトカの空き瓶を放り投げ、割る。
「危ないでしょ、アリスが怪我したら、どうするのよ！」
「うるせぇなぁ、アリスアリスアリス。大体、こいつが生まれて来なけりゃ、母さんが死ぬ事ァ無かったんだ！」
「違うわよ、大体母さんは、元々体が弱かった…」
そう言い終わる前に、父さんは私に掴みかかって、お金をもぎ取り、床に突き飛ばす。私はきっ、と睨みつけた。
「ちょっと、どこ行くのよ！」
コートも着ずにドアを開け、
「胸糞悪ィ、飲み直してくる。」
と、喧しくドアを閉めた。
「…アリス？」まだ7才の妹は、部屋の隅でうずくまっている。そばに近寄って、手を握ってあげる。
と、ぬるっとした感触。血だ。
「大丈夫？怪我したの？」
アリスはふるふると首を振る。そこでよく見てみると、出血しているのはアリスでなく、私だった。
さっき床に手を着いたとき、ガラスの破片で手を切ってしまったようだった。
適当に消毒して、ガラスの破片が刺さっていないかを確かめ、包帯を巻きつける。
もう一度、アリスの手を固く握り締める。私の痛みはどうだっていい。
…アリスの目は、どこも見てはいない。強いて言えば、空虚を見つめている。
「父さんの言った事は、気にしちゃ駄目よ。皆が皆、生きる権利はあるんだから。
…それに、何より、アリスは私の、たった一人の、大切な妹なんだから…。」
手で涙を拭いてあげる。傷口に涙が染みる。赤い目が私を見て、ほ

とんど聞き取れない声で、何か呟く。

「え、もう来なくていいって、どういう事ですか？」
アルバイト先の職場の事務室に、私は呼び出された。
「だから、言った通りだよ。こっとも経営が厳しくてね。済まないけれど、クビだ。」
私は食い下がった。
「けど、困ります。私も厳しくて、今月のパンを買えるかも分からないんです。」
そんな事知ったこっちゃないよ、とでも言いたげな目だった。
結局私は、雪の降り積もる中に追い出された。
…体でも売ろうか。なんだか色々とどうでも良くなって、あはは、と笑いが漏れた。
アリス。私も、生きるのが辛いよ。明日から、どうすればいいんだろう。
お腹が空いた。でも、歩いて帰らないと。バス賃も無いから。吹雪？森？
ともかく、凍える。でも、アリスが家に。でも、またつまづいて、ぼふっと、雪の上に倒れ込む。
月は、吹雪いているのに眩しく見える。あぁ、もう、死ぬのかな？

目が覚めると、暖かい部屋に寝ていた。私は暖炉の傍で、毛布をかけられて、眠っていたようだ。ここは、天国？
ドアから人が入ってくる。老人で、長い髭を生やした男性。それと、隣に犬。
「目が覚めたか」そして、飲めというふうに、ウォトカの瓶を差し出す。
「済みません。お酒は飲まないんです。飲みたく、ないんです。」
老人は一つも気にせず、自分で一口を飲む。犬は、物音ひとつ立てず私を見る。瓶から口を離し、言う。

「お前は倒れてた。俺がたまたまそこを通りかかって、家に連れてきた。分かったな？さぁ、家に帰るんだ。」
とその時、その老人が小銃を抱えていることに気付いた。
銃に視線が向いた事を察してか、言った。
「俺は猟師なんだ。兎とか、鹿とか、そういった動物を狩る…」
「手伝わせて下さい。」そう、口が動いた。
「その、ここで働かせて下さい。私、仕事も無くて、お金も無くて…八方塞がりなんです。」
いかにも、面倒臭い奴だといった表情で言った。
「あのな。こういう仕事は、儲からないのが常なんだ。それに、女子供にはキツい。」
「体力には自信があります。それに、体を売るより、マシです。」
老人は、哀れむような目で私を見た。そう見られたって、実際哀れだった。
「…お前、名前は？」
「イリス・イワノヴナ・ソーンツェワ。」
「生まれは？」
「合衆国。」
「年は？」
「15。」
ふむ。とひとつ、意味深に頷いた。
犬は、沈黙に耐えられないふうに、クーンと鳴いた。
私は瞬き一つせずに、老人が煙草を取り出し、火を点けるのを見ていた。
「分かった。ここに居ていい。」
そうして、私は師匠の弟子になった。

「アリス？どこに居るの？」家に帰ったが、いつも座っている椅子や、寝室には居なかった。
すると、シャワーの音がしているのに気付き、浴室へと向かった。

「…アリス？」
アリスは裸で、シャワーを浴びながら、床に座り込み、うずくまっていた。
ひどいくまで、一睡もしていないようだった。
「…昨日」アリスが呟く。
「お姉ちゃんも、お父さんも、居なくて、ひとりぼっち」
口だけが動いて、声がほとんど出ていないようだった。
「私、二人に嫌われて、捨てられたと思った。」
涙が一粒、シャワーに混じって落ちた。いや、シャワーの一粒一粒が全部、アリスの涙なのかもしれない。
私は服が濡れるのも気にせずに、そのままアリスを抱きしめた。
私もアリスも、何も言わなかった。ただ、二人で一緒に、声をあげて泣いた。

あの日以来、父さんは帰って来なかった。私も狩人の生活に慣れた、動物を殺す事に抵抗が無くなった頃だった。
１８になった日、私は二重国籍だったので、アメリカかロシア、どちらかを選ばなければならなかった。
ロシアの土地、師匠、父さんがまだ、生きているかも知れない土地。アメリカ、生まれ故郷、先進国、安定、解放…結局、私は米国を選んだ。
最初で最後、アリスと共に師匠のもとへ行き、その旨を告げた。
「ばあさんに似ている」師匠は、そう言った。「え？」私は言った。
「二人とも、よく似ている。顔がじゃない、雰囲気がだ。何でだろうなぁ…まぁ、いい。」
と、私たち姉妹二人それぞれの頭に手を乗せて、言う。
「生きろ。とにかく、頑張って生きろ。」
私は、師匠が父さんだったら、どんなに良かったろうと思った。

三年間、お金を溜めに溜めて乗った飛行機の中で、クッキーを買

って、紅茶と合わせ、二人で食べた。
エコノミークラスで、窮屈で、とても眠れなかった。
「ごめんね、アリス。疲れちゃうでしょ？」
アリスは、ううん、と首を振った。
「お姉ちゃんと一緒なら、どんな所だって、大丈夫だよ。」

銃を買い、ギルと知り合った。警察学校で、車の免許をとった。
銃の成績を褒められた。
私が警察を目指したの理由は、自分では分からない。罰せられる立場から、罰する立場へと回りたかっただけかもしれない。
配属が決まって、そこで、スーと出会った。
「あんた、見ない顔ね。新人？何て名前？」
「イリス・ソーンツェワといいます。」
「イリス？アイリスじゃなくて？」
「ロシア系なので。」そう、忌々しい、あの男の血。イワノヴナ。
「ふぅん。あたしは、スザンナ・マクローラン。スー、って呼んでくれていいわよ。」
色々と、世話を焼いてくれた。
「始末書の書き方？ほら、貸しなさい。」
「へぇ！刑事になれたんだ。若いのにねぇ…」
「イリスほら、忘れ物してるわよ。」
スーは私の友達…なのかな。
私も、アリスも、友達が分からない。同年代、というより、他の人間は皆敵だった。
私が職に就けば誰かは職にあぶれ、誰かが笑うとき私は泣いている。
だから、どうして助け合うのか、仲良くするのか、分からなかった。
「そりゃ、友達だもの。」スーは当然の如く言った。
「友達ってのはねぇ、親が生まれた時から決まってるように、あらかじめ助け合うよう、決められてるのよ。」
私は、この言葉をもじって、それらしくアリスに教えたのだった。

―　アリス。私の悩み。そして、最愛の、唯一の家族。

目が覚めると、そこは恐らく、病室だった。私はベッドに寝かされていた。目を動かしてみる。視界の端に、スーが見える。制服でなく、合皮のジャケットに、ジーンズ、白いTシャツを着ていた。

「あ、起きた。」私は、スーの方を向く。

「あんた、失血して気絶してたのよ。ほい、これが体に入ってた弾丸だと。記念に貰っといた。」

コロンと、どんぐり程の大きさの物体を、私の枕元に転がす。私は起きようとして、左の脇腹に痛みが走る。

触ると、包帯が巻いてあるらしかった。

「あーあー、無理しないの。起きたいんなら、今ベッドごと起こしてあげるから。」と、クランクを回し始める。

「あ、それで、犯人たちは…」

スーが答える。

「あの後、応援がやってきて、ちゃんと逮捕されて、一件落着。って、ギルが言ってたわ。」

「…え？スーが、私をここに運んできてくれたんじゃ、ないの？」

「あたし？あたしは内勤だから。只のお見舞いよ。」

ベッドが起き上がって、私はスーと同じ目線の高さになる。

「で、別の奴から聞いたんだけどねぇ、あんたが撃たれたもんで、かなり焦ってたみたいよ、ギル。

応急処置しないと！とか、俺が病院に連れていく！とか、止血したあんたを担いで車に乗せて、救急車も待たずに行ったとか。」

「…ギルが…」

私は、心臓が脈打つのを感じていた。

と、廊下が慌ただしい。話し声もする。部屋の入口に目をやる。

白い二つ結びが、私目がけて走ってくる。

「お姉ちゃん！」目に涙を浮かべて、この上なく、不安そうな顔。

アリスだ。でも、どうして？すると、スーが答える。
「あー…あたしが、教えといたの。あんたの家に連絡して。」
アリスは、心配そうに私の左手を握っている。
「もう、大丈夫だから。」
ぐっと、左手に力を込める。もう、痛くない。
入口に目を戻すと、白衣を着た長身の医師と、隣には、何故かハンナさん。
「なんだ？あの子は…」医師が呟く。
「あーっとねぇ、あの子はアリスちゃん。前言ったじゃん、俺の――」
「なんだ、お前の子供かと思った。」表情ひとつ変えずに医師は言う。
「なっ…俺　――　あたし、まだ１８ですッ！」
ハンナさんは、女の子みたいに、恥ずかしそうに叫んだ。
「イリス・ソーンツェワさん？」医師は私に聞く。
「あ、はい…」
「主治医のルイス・フランクリンです。弾は幸いにも重要な器官を逸れていました。
ま、もう弾は取り出しちゃったんですが、失血が多くて、まだフラッとするかもしれません。
あとは一応、二、三日入院した方が良いですね。」
はぁ。と、私は生返事をした。保険…下りるよね？
その、フランク先生は説明を終えると、ポケットから煙草を取り出し、一本口に咥えようとして、
「ちょっと。院内禁煙でしょ。」と、ハンナさんに取り上げられる。
初めて顔をしかめる。夫婦みたいだ、と私は思った。
「あの煙草。フランスの、ジタン・マイズね。」と、聞いてもいないのにスーがささやく。
「ま、あとは皆さん、患者さんに障るといけないので、見舞いも程々にして、帰って下さいね。」

と、フランク先生は去って行った。何だか、適当だなぁ。
「あの、お久しぶりです、ハンナさん。えっと…今日はどうして？」
「え？ああ、久しぶりです。今日は俺は、たまたまカウン　――
…病院に用事があって寄っただけなんですけど、
そこで、迷子のアリスちゃんを見つけて。初めて会った時みたいに、凄くオロオロしてて。
病室は、０９５号室はどこですか、て。それで、案内してあげたんです。」
と、スーの方をチラと見る。あ、そうか。この二人は初対面なんだ。それぞれを知っていても、両方がそれぞれを知っているとは限らない訳で。当たり前だけど、何だか不思議だ。
スーが切り出す。
「ハンナさん？あたしはスザンナよ。スザンナ・マクローラン。イリスの同僚で、警察官。よろしくね。」
あ、どうも。といった感じに、二人は握手を交わした。
「で、あんた、入院すんの？二日？」
「まぁ、一応、そうしておこうかな。」保険が下りるかどうか、それが不安だけど。
「その間、妹ちゃんはどうすんの？」
そうか。病院に泊まってもらう訳にはいかないし、アリスを一人には出来ないし、したくない。
「ハンナさん。」
自分でもなかなか不躾なお願いをしたと思う。
「私が入院している間、アリスを預かってくれませんか？」
こう言って一番驚いたのは、ハンナさんでなくアリスだった。
「！？　え、お姉ちゃん、…　――　ダメ、絶対ニ迷惑、デス。」
「そんな事無いよ、アリスちゃん。家にはもう、一人居候がいるようなもんだし。
一人増えるぐらい、どうって事ないって。」
「うんうん。あたしも若いときは、友達の家を泊まってまわったも

んよ。」
トモダチ…とアリスは呟いた。少し、嬉しげだ。
「良いですよ、イリスさん。じゃ今からちょっと、アリスちゃんと一緒に着替えとか持ってきますね。」

＊

「オ姉チャン、大丈夫デショウカ…」
アリスちゃんは、か細い声で言った。
「大丈夫だよ。フランク先生は良い先生だし…」
と、アリスちゃんが立ち止まる。振り返ってみると、目に涙を浮かべている。
「大丈夫だって！安静にするだけの入院だし、それに2、3日だけでしょ？
もしかしたらイリスさん、それじゃ足りなくてもう一週間休みをとるかも。
そしたら、二人でもっと一緒に過ごせるし…」
俺は、アリスちゃんにずんずんと近付いていって、左手を差し出す。
「ほら、行こ？櫻子も、待ってるしさ。」

＊

「ハイ…」手で涙を拭い、ハンナさんの手を握ろうとして、手首を掴んでしまう。
ゾリッと、軽石のような感触がする。
「どしたの？」私は戸惑った。言っていいのか、わるいのか。嫌われ、ないだろうか。
と、ハンナさんは「あっ」と気付いたようで、「これ？」と、その傷跡を指した。
私はしまったと思った。人には他人に易々と触れられたくない事の

ひとつやふたつ、あるハズだ。
なのに、私は安易にもその傷に触れてしまったのだ。
「スミマセン。アノ…」
「んーん。気にしないで良いよ。」
傷は多くは無かったけれど、紅く、深く、刻まれていた。私のポケットに入っている紙切れの、ハンナさんの文字の如く。
「これはね…俺があたしだった頃の、名残り。」
ハンナさんは、感慨深そうに言った。
「自分デ」私の胸は、爆発しそうな程に高鳴っていた。
「自分デ、シタンデスカ？」
「そうだね。」ハンナさんは、私の目を見た。私はドキッとした。
というのも、そう言ったハンナさんは、全く以って、いつも通りのハンナさんだったからだ。
「一緒に髪も切ったんだ。長くて、今のアリスちゃんぐらいで…昔はね。
でも、どうしても違和感があった。自分の中に男と女の自分が居て、
それが気分とか、体調とか…そういうので、ころころと変わってね、
皆と違う、俺は何か変なんじゃないかって、一人で悩んでた。」
少しの間、沈黙があり、ただ風だけが流れている。
「でも、何だろう。コレをしたから ―― お陰と言ってもいいかな ―― 先生に会えて、今の俺が居て、
俺が俺らしく居られるんだと思う。」
「…難シイデス。」黙って聞いていた私は、ただそれだけ言った。
ハンナさんは刃物で身体を、私は言葉で心を…形は違えど、同じ事なのかもしれない。
「まぁ、そうだね。」
ばつが悪く、二人とも黙っていた。
ただ、親しみはあった。優しいハンナさんと、弱いハンナさんの、

二つ共に。
私はハンナさんを見たり、地面を見たり、空を見たりしていた。
空は、曇っている。今にも、降り出しそうだった。
「ハンナサ　―　」そう言いかけて、ハンナさんが驚きの声をあげた。
「あ」
「エ？」「ア」
雪だ。雲が、形を変えてゆっくりと、私たちの間に舞い下りた。

１０話

Ｘ

「お兄ちゃん、早くしてよー。」
「ヘンリさん、遅いー。」
クレアとシェーラちゃんに引き連れられて、雪の積もる道を、僕へンリー・ガーネットはハンナの家へと向かう。
何でも、日本の伝統衣装『キモノ』を着せてもらう為に、行くんだとか。
わざわざ着せてもらうんじゃなくて、『キモノ』を貸してもらって、自分で着たら良いんじゃないのか？
「もー、お兄ちゃん、分かってないんだから。キモノはねぇ、素人が着られるものじゃないのよ？」
んだんだ、とシェーラちゃんが相槌を入れる。
「それにしたって、僕が来る必要は無いだろう。」
僕は、忙しいんだよ？小説のネタを考えたり…まぁ、特に後は、無いけれど…
「もー、分かってないんだから、お兄ちゃんは。私はね、私の晴れ姿をお兄ちゃんに見てもらいたいの！」
んだん…ん？と、シェーラちゃんが疑問符を出す。
まぁ、散歩がてら、気分転換にはなるだろう。

ハンナちゃんの家では、見知らぬ、キモノの日本人女性が出迎えてくれた。
どうも。と握手をする。えぇと、靴を脱ぐんだったか。そしてスリッパに履き換える。
クレアの通訳によると、サクラコさん、という名前だそうだ。…え、１７才？え、ハンナちゃんと従妹？

「お兄ちゃん、私昨日それ、話したじゃん…」
うーん、全く聞き流していた。言われてみれば、どことなくハンナちゃんに似ている。顔という訳でなく、雰囲気が。
三人は、和室へと入っていった。僕は、ひとり ―― いや、奥にもう一人居た。
テーブルについて、紅茶を飲みながら、本を読んでいる、小さな女の子だ。
その子は本に熱中していて、僕が入って来た事にすら気付いていなかった。
ふと、カップの紅茶が無くなったようで、注ごうとティーポットに手をかけようとして、僕に気付いた。
「エ？アノ…ドナタ、デスカ？」片言の英語で、そう質問する。それは僕も聞きたい。
と、ふとクレアの声が脳裏に蘇ってきた。
『白髪（はくはつ）を真ん中分け、二つ結び。背が低くて、ちょっと猫背で余計小さく見える、大きな栗色の目をした ―― 』
「アリスちゃん？」
と言うと、その子は大きく目を見開いた。
「ドウシテ、私ノ名前ヲ…？」
知らない人が自分の名前を知っていたら、確かに驚くだろう。
「僕はヘンリー・ガーネット。君がアリス・ソーンツェワちゃんなら、クレアは知ってるね？彼女は、僕の妹なんだ。」
あぁ、と納得したようだった。
「何の本を読んでるのかな？」
彼女は、本の題名を見せてくれた。
『Ａｎ　Ａ．Ｉ．　Ｃｈａｎｎｅｌ　ｈａｄ．．．』レグニー・Ｎ・ハッター著。
「面白いかい？」僕は、嬉しさを堪えて聞いた。
「ハイ。ハンナサンノ本棚ニアッタンデスケド…ＳＦ、ッテ言ウンデショウカ？

デモ、主題ハそこデハ無クテ、ソノ未来的ナ機械、道具ヲ持ッタ人ノ気持チ、機械ニホンロウサレル事、
トカヲ描キタイノダト思イマス。」
「そう。そこなんだよ。」
ハイ？と問い直された。僕は慌てて付け足す。
「そのつまり、物語っていうのはどうしたって人の話なんだよ。だから、…確かに状況も面白さの一つだけど、
僕はむしろ、そういう状況の積み重ねで描き出される人間ドラマが、究極のテーマなんじゃないかな、と思うんだよ。物語のね。」
分かったのか分からないのか曖昧に頷きながら、アリスちゃんは言った。
「イズレニシテモ、面白イデス。マダ、全部読ミ終ワッテ無イデスケド…」
この子には、芸術の才能があるなぁ。

＊

「どうした、何か考えてるのか？」
珍しく、アルが話しかけてくる。彼は窓の外を見ている。
「んー…コレの事さ、あの子に話しちゃってさ。」
「誰に？」
「アリスちゃん。」
ブゥンと、一台の車が通る。人通りは少ない。
「なぁんで、話しちゃったんだろう、って。」
「話したかったからじゃないか？」
「うん、まぁね。いずれは気付かれると思ってた。」
傷痕を指でなぞる。硬くて、細長い。
「その子に、嫌われたのか？」
「ううん。特に、何も。」
子供たちが店の前を通っていく。皆、眩しい程の笑顔だ。

「じゃあ、良いじゃないか。」
ポンと、アルは俺の肩を叩き、奥の厨房に入っていく。
「そうだね。」
俺は振り返らずに、言う。

＊

私の服と銃は、どうなったんだろう？
服は私の血が染み込んでいるはずだし、銃は発砲したまま、整備していない。そうだ、始末書も書かないと。

「服なら、私がクリーニングに出しておいたわよ。」
スーとギルは、二人で見舞いに来てくれた。
「始末書はさ、ギルが書いてくれるでしょ。ね？あんたは何にも心配しないで、寝てなさい。」
「お前の拳銃は、俺が整備しておいたよ。パートナーも、入院中は別の奴が代わるから、心配すんな。」
私は何故だかドキッとした。そして、聞かずには居られなかった。
「ギ、ギルのパートナーは、男の人？女の人？というより、誰？」
「ん？あーっと、ハツシロ先輩が教えてた、確かキヨヒコとかいう、日本人。男だ。
けど、それがどうかしたのか？」
「んーん別に何でもないよ。ただちょっと気になっただけ。」
そうか？と不思議がられたけど、誤魔化せたんじゃないかと思う。
…あぁ、駄目だ。ギルの目を見れない。入院する前は、別に何とも無かったのに。
「…俺の顔に何かついてんのか？」
怪訝そうな顔で、ギルに聞かれた。
「ま、俺はもう行くよ。そいつに色々、教えないといけないしな。」
と、ギルは去って行った。…あ、背中に、糸くず。

「…あんた、ギルの事好きでしょ。」
「へ？！なな、何で？！」
思いがけない事を言われて、顔にどんどん血が昇ってくる。まるで、アリスみたいに。
「言っとくけど、バレバレよ？あんたぐらい分かりやすい奴、初めて見たわ。」
「…でも、」
私は反論したかった。
「私、今までに男の人を『好き』って思った事無いから、これが恋なのかどうか、分かんないよ。」
「じゃあ、きっぱり言っておきます。それは恋です。」
きっぱり言われてしまった。恋…この私が？
　すると突然、ギルが戻ってくる。私は「ひゃうっ」と、飛び上がる。
「あー、そうだ。ハツシロ先輩が言ってたんだけどな。お前が撃たれたのはトカレフ拳銃で、
　この辺はそれがどうやら出回ってるらしいから、クラス３Ａ＋の防弾ベストを着た方がいいぞ、だと。」
「え、うん。」私はこくこくと頷いた。
「それだけ。じゃな。」
ぼーっとして、隣を見ると、スーはニヤニヤしていた。
「そ、そんなじゃないってばぁっ！」

＊

「くーちゃんもれーちゃんも、胸おっきいさかい、詰め物せなあかんね。」
着付けをしてくれながら、サクラコは言った。
和服というのは、寸胴な体形に合う物だから、逆に女性的な体形だと、着付けしづらいのだそうだ。

「じゃあ、アリスちゃんとか、ハンナとかには着つけるのは、楽そうですね。」
「そやね。でもあっちゃんに合わせるには、着物かなりおはしょりせなあかんし、
ハンちゃんはそもそも、女物は着とうないゆうし…作務衣とかは着とったんやけどね。京都で。」
やっぱり、ハンナは男らしく、というよりも中性的でありたいみたいだ。
小さい時から、私と話すときは今のように男っぽい言葉遣いだったし、
スカートを履いた姿を見た事は無かったし、『Ｈａｎｎａｈ』という名前が女っぽいと、愚痴ってはいた。
でも、そんなに深刻な悩みだとは、思っていなかった。ＳＯＳに気付いてやれなかった。
その、個人（オレ）と社会（ワタシ）との間で、苦しんでいたのだと思う。
彼女を自殺にまで追い詰めるほどに。
「クレア？んが、難かすー顔すてらな。どすた？」
シェーラに呼びかけられて、はっと気が付く。
「ううん、平気。大丈夫、大丈夫。」
そう、きっと大丈夫。ハンナにも、よくそう言ったっけ。

＊

「あっちゃん、お味噌汁食べられる？」
「オミソ…？」
「ていうかアリスちゃん、お箸使える？」
「オハシ…？」
一緒の夕飯はとにかく大変だった。
焼き鮭も、糠漬けも、味噌汁も米のご飯も、何もかもがアリスちゃんには初体験で、

特に箸が使えない為に、先割れスプーンで食べようとしてもなかなか鮭は捕まってくれず、
最終的には俺があーんして食べさせてあげたりした。
当然真っ赤になっていたけれど、「デモ、珍シクテ、凄ク美味シカッタデス」と、いうことだ。

その夜、お風呂から上がった後、三人で川の字になって寝た。
俺はともかくアリスちゃんは床（畳だけど）で寝るのに抵抗があるんじゃないかと思ったけれど、そうでも無かった。
「私、ドコデモ寝ラレマスカラ。」少し照れながら、座リナガラデモ寝ラレマス、とも言った。
俺が川の字の二画目で、一画目はアリスちゃん、三画目は櫻子だった。

さすがに疲れたのか、真っ先にアリスちゃんが寝息をたてて、眠り始めた。
それを見計らって、俺は櫻子に話しかける。
「ねぇ、まだ、起きてる？」
櫻子は布団をもぞもぞさせて、こっちを向いた。
「起きとるよ。」眠たそうな声で応える。
「あの、さぁ。」
俺は、自傷痕の事を説明…いや言い訳しようと思っていた。いずれ、気付かれるのなら。
「俺の…」と言って、後が続かない。嫌われ、ないだろうか。
「左手首のこと？」櫻子が言った。
「…知ってたの？」
うん、気付いてた。と櫻子は、何でもなさそうに言う。
「あのさ、これは…」
「言わんといて。」
櫻子に制止される。しぃっ、と口に、指を当てながら。
「昔、ハンちゃんに何か、辛い事があった。けど、今はこうやって、

ちゃあんと生きてる。」
ぎゅっと、俺の左手を握る。
「ウチには、それで充分。」目を閉じて、笑ったように眠りに落ちる。
うぅん…とアリスちゃんが唸って、「お姉(Iris)ちゃん…」と呟き、左手をどこへともなく差し伸べる。
小さくて、か細い指だ。俺は、その手を固く握りしめてやる。
すると、アリスちゃんの表情が少し、穏やかになる。
　両手に花と言うか、両手を二人に握られながら、俺は思う。
『Ｈａｎｎａｈ』は、英語だと『ハナ』という発音に近い。昔、父さんに聞いた事がある。どうして、俺に『Ｈａｎｎａｈ』と名付けたの？曰く、
「男の子でも女の子でも、子供の名前は『華』にしようと決めていた。
　子供は、花のように素朴で美しく、皆から愛されるべきだ。」
「だから、『Ｈａｎｎａｈ(ハナ)』なんだ。」と。

１１話

ＸＩ

イリスさんが退院して、何日目かの平日。
雪の積もった道を櫻子と散歩していると、急に櫻子が足を止めた。
「何？どしたの？」
「あ、ハンちゃん。この子、ウチ迷子やと思うんやけど…」
見ると、１０才ぐらいの黒人の、もこもこした髪の女の子が、家と家の隙間にうずくまっている。
「なぁ自分、どないしたん？迷子になってしもたんか？」
日本語で話しかけても、通じないと思うけど…
「…って、その子、裸足じゃん！」
「わ、ホンマや！」
咄嗟にその子を抱えて、俺たちは靴屋へと急いだ。
「この子の足に合って、えっと…」財布の中を確かめる。あまり入っていない。
「…出来れば安い奴、あります？」
和服の女と、裸足の、汚れた白ワンピース少女を引き連れた俺を、店員は明らかに不審の目で見ていたけれど、足のサイズを目で測ったうえで、赤いビニル製の靴を出してくれた。
「９ドル５０セントとなります。」
俺が会計を済ませているうちに、
「あっハンちゃん、あの子逃げはるよ！」
どこかへ消えてしまった。

＊

私がシェーラと、午後の授業が始まるまでの暇を持て余している

と、その子は突然に現れた。
白いぼろぼろのワンピースに、赤いピカピカの靴。黒人で、もこもことした髪の毛をしていた。
そして、同じく突然に倒れた。
「え、え、大丈夫、ねぇ？！」
私が駆け寄ってその子を揺すると、ぐるるるる…といった、大きなお腹の音がした。
「なんだァんが、腹空かしてらのが、」
シェーラは、鞄からハムのサンドイッチと、水筒に入った温かいレモンティーを紙コップに注ぎ、
「か、け。」と渡した。
それを見るやいなや、手掴みでガツガツと食べ始めた。食べ終えて、小さくげっぷをした。
「ねぇ、どうしたの？あなたは誰？お家は、どこにあるの？」
と、言い終わるか終わらないかのうちに、走り出して行ってしまった。

＊

その子は、私の家の前をうろうろしていた。どうも居場所が、行き場所が無くてそうしているようだった。
放っておけなかったし、雪も降っているし、絶対にあの格好　――
白の、ぼろぼろのワンピースに、
赤い、ピカピカの靴　――　では寒いだろうと思い、私は中に招こうと、外に出た。
「ねぇ。」その子はビクッと、私の方を見た。
「寒く、ないかな。もし良かったら、家に入らない？」
その子は、目を白黒させていた。あ、そうか。英語で話しかけてなかった。
「エエト…来テ下サイ。」

その子は素直に、家の中に入ってくれた。身長も頭ひとつ分しか違わなかったし、警戒しなかったのだろう。この国は、背の高い人が多いから。
と、私は一つの事に気付いた。身体に、顔に、無数の傷がある。擦り傷、切り傷、打ち身、鬱血…とにかく、様々な種類だった。
そして、やはり寒いのか、ぶるぶると震えていた。
「ねぇ、」私は提案した。
「オフロ…入リマセンカ？温カイ、デスヨ。」

やはり、服の下にも沢山の傷があった。…虐待、なのかな。
幸い、染みそうなものは無かったので、石鹸で体中を洗ってあげた。
ふと、私って女中みたいだな、と思った。そういう仕事が合っているのかも。
彼女は温かいシャワーを、眩しそうに浴びていた。
バスタオルで体を拭いてあげながら、彼女の、ぼろぼろで汚れた服を見やった。
あれも、洗ってあげようかな。でも、その間の代わりの服なんて…
「あ。」
私は思い付いて、部屋に走った。そして、クローゼットを開けて、それらを持ちだして、バスルームに急いだ。
あの、私には短いスカートのワンピースと、昔の私の下着。
着せてあげると、やっぱり丁度良かった。それと同時に、その子のお腹がぐぅと鳴った。
「お腹が空いているの？今、リンゴをむいて…」
と言い終わらないうちに、ばたん、と扉が閉まった。

＊

「あー、あの子、どこに行ったんだろう…」

櫻子と一緒に「どこに行ってしもたんやろねぇ」とキョロキョロしていると、アリスちゃんにばったり出会った。
「ア、ハンナサン。黒人ノ女ノ子、見マセンデシタ？」
「え、アリスちゃんも？…あの子、大丈夫かなぁ。なんか傷だらけだったし…」
「私、心配デス。」
「櫻子さぁ、どこにいるか、見当付かない？」
と、答えの分かりきっている質問を俺はした。そんな事、さっきから一緒に居たのだから付くはずもない。
「…何だか、あっちゃんもハンちゃんも、お母さんみたいやね。」
「へ？」
意外な返答に、俺は戸惑った。母親に会った事も無い俺が、お母さんみたい？
「ア、ハンナサン！」アリスちゃんが指差す先に、あの子が居た。
そして、追いかけっこが始まった。
でも、アリスちゃんは走り慣れてないようだし、俺も体力が無いわで、敵わなかった。
「ナンダカ、疲レマシタ…」
「うん…足、速いね。あの子…」
あ。櫻子、どっかに置いてきちゃった。草履だし、着物だから走れないんだよね。
「おーい、ハンちゃーん。」と、後ろから櫻子の声。追いついたみたいだ。
「逃げられちゃったん？」
「うん。…疲れた。どっかで、お茶でもしよっか。」

喫茶店に行くと、クレアにシェーラも居た。聞けば、二人もあの子に会ったとか。
「俺は靴を買ってあげた。」「ウチは何も。言葉も分からんし。」
「オラはサンドイッチけだ。」

「私は質問したけど、答えてくれなかった。というか、通じてたのかな？英語で質問しちゃった。」
「通ジテタト思イマス…。私ハしゃわーシテアゲテ、服ヲ着セテアゲマシタ。
エト…丈ノ短イ、わんぴーす。」
「えーあれ、めごがったのサ。」「そーだよー。」
そんなふうに、会話は弾んだ。
「でもまぁ、何か楽しかったよね。」俺がそう言うと、皆も同意した。
クレアとシェーラは大学へ行かないと、と言う事で、櫻子は二人についていった。
途中で家に帰るから、お昼ご飯作っとくさかいに、と言う事だった。

アリスちゃんと二人で、ゆっくりとお茶を楽しんでいると、
「ハンナ？」
と、呼びかけられた。驚いて振り返ると、
「スザンナさん。」だった。
「スーでいいわよ。『さん』付けは、どうも具合が悪いや。」
うへへ、とスザンナさんは笑った。
「席、ちょっと良いかしら。あ、ホットミルクね。」
俺とアリスちゃんの、向かい側に座る。
「実はちょっと頼みがあるのよ。その…イリスの事でね？」
「オ姉チャンノ事デスカ？」意外な登場に驚いたようだ。
「そうなのよ、アリスちゃん。何か最近、イリス、変じゃない？」
「ハイ。言ワレテミルト確カニ…急ニ髪型ヲ変エタリ、ボーットシテ、一人デにやにやシテタリ、赤クナッタリ。
オ風呂ハ普段ヨリ長イシ…ア、ソウデス。特ニ、最近ぱじゃまヲ買ッテ、着テ寝テルンデス。
前ハ、下着デ寝テタンデスケド。」
確かに、ちょっと変かもなぁ。コーヒーを一口飲む。

「実は、イリスね…」
アリスちゃんは、身を乗り出して聞こうとする。
「ギルに、恋してるみたいなのよ。」
思わず俺はむせた。え、ギル？あのギル？高校の時振られた彼女を未だに引きずっている、
警察官の、ギルバート・アレン巡査部長ですか？
「そう。で、頼みってのはさ、二人をくっつけちゃおうって話よ。
この間ギルに飲ませて聞いてみたら、イリスはタイプだっていうし。
イリスはあの子鈍感だから、　――　それに二人とも、意外とロマンチストだし。
で今度、ソーンツェワ宅でパーティーか何か開いて、あたしはイリスを、ハンナはギルと、
お友達を他にも呼んでもいいと思うけど…ともかくそこで告らせて、お持ち帰りさせちゃおうっていう。」
「スザンナさ…スー。ひとつ良いですか？」
「何でもどうぞ。」
「楽しんでますよね？」
「ええ、もちろん楽しいですよー。ま、何もかもがうまく行くとは思ってないけどね。」
まぁ、ギルは会う度「彼女欲しー」とうるさいし、それに一途なほうだし。
だから未だに前の彼女を引きずっているのだけど。両想いなら、結ばせてあげるべきなのかも。
けれど、一番状況を飲み込めていないのは、当事者の妹であるアリスちゃんだった。
「エット…愛トカ、恋トカッテ、一体何デスカ？」

＊

「愛とか恋する、っていうのは、その人の事を大切にしたいな。
とか、ずっと一緒に居たいな。とかいう気持ちの事よ。」
スザンナさんは言った。
「ア、ソレナラ私ハ、ハンナサンニ恋シテマス。」
私は、単純にそう思った。ハンナさんとの関係を大切にしたいし、
ずっと、一緒に居たい。
けれど、ハンナさんは大きく咳をした…いた、コーヒーを飲んでた
から、むせたのかな？
「いやいやいや…アリスちゃん。そういうのは恋って言わないんだ
よ。
ただ単に友達（friend）で良いんじゃないかな。」
トモダチ。私トハンナサンハ、友達デスカ？
「え、違うの？俺はずっと、そうだと思ってたけど。」
何かが心の中に湧いてくるのを感じて、私はそれが顔に表れるのを
隠そうとして、慌てて紅茶を飲み込んだ。
紅茶は熱いままその何かと溶け合い、私の中へと沁み込んだ。

結局のところ、今度の金曜の夕方から、私の家でパーティーをや
る事になったみたいだ。
「何ノ、ぱーてぃーデスカ？くりすますニハ、マダ早イデスケド。」
「うーん…『イリスさん退院記念パーティー』かなぁ。」
よくは分からないけど、人がたくさん来るそうなので、帰ったらま
ず掃除をしよう、と決めた。
ハンナさんと別れて、家に入ろうとしたとき、ドアの横に小さな
影があった。
「誰？」と覗き込むと、あの女の子だった。
「――」ほとんど聞き取れない声で、その子は言った。
「え？」間もなく、その子が服を脱ぎだしたので、
「マ、待ッテ！分カリマシタ、家ニ入リマショウ、マズ！」
たぶん、服を返してほしいのだろうと思った。まだ、洗ってないん

だけど…それでも、良いの？
「ネエ、名前ハ、何トイウノ？」
クローゼットを引っかき回しながら、私は尋ねた。
「…ダイナ…」小さく、呟いた。
「ダイナチャン。私ハアリス。アノ服ハ返シテアゲマス。」たぶん、お気に入りなのだと思う。
「デモマズ、コレヲ受ケ取ッテ下サイ。」
長袖で、膝の丈の、厚くて丈夫な、古いワンピース。ロシアに居た頃の、私の服。
ダイナちゃんはふるふると首を振った。でも、私も食い下がった。
「受ケ取ッテ下サイ。アナタト、ソシテ私ノ為ニモ。」

＊

「今度の金曜、パーティーやるんだよ。名目は、『イリスさん退院記念パーティー』。俺は料理担当なんだ。
良かったら、フランク先生も、来ない？」
「難しいな。多分予約は入っているし、第一…」
先生は、苦虫を噛んだような顔をして、コーヒーを飲んだ。
難しい頼みなのは、分かっていた。医師はいつだって忙しいし、特定の患者と親しくなりすぎるのは、好ましい事ではない。
それでも俺は、フランク先生に来て欲しかった。

＊

12話とエピローグ

XII

「一体、誰と待ち合わせ？もう、パーティー始まっちゃうよ。」
家から少し離れた街の中のクリスマスツリーの前で、私とスーは雪の降る中その誰かを待っていた。
「まだイヴですらないのに、ツリーだなんて気が早いと思わない？」
はぐらかすように、スーは言った。
「うーん…私はそんな真面目なキリスト教徒じゃないから、よく分からないけど…」
「あ、来た。」
「…誰？」
その人は、褐色の肌をした、直毛の髪を後ろで結んでいて、目の黒い、痩せた男性だった。
おーい、と手を振っている。
「あいつ？あいつはエド。スティーヴン・エドワード・ホーキンス。」
「友達？」
「ん？弟。」
「へ…？弟さん居るなんて、聞いた事ないよ？！」
「あれ、言ってなかったっけ？…んー、まぁ、種違いの弟だけどね。」
種違いってどういう意味だろうと思っていると、彼が近付いてきた。
「ねーちゃん、急に呼び出して、何の用かな。俺、忙しいんだけど…」
「この子が退院した記念に、パーティー開くの。で、あんたも強制参加ね。」
「はぁ？それなら、事前に言って貰わなきゃ、困るよ。

大体、どこぞの誰かも知らない、こんな…」
と、彼は私の顔を見る。そして、呆然として、
「美人…」と呟く。いい加減、嘘くさく感じてくる。はっと気が付いて、
「あー、俺、今、フランク先生に電話してくるわ。」
携帯電話を取り出しながら、路地裏へ向かう。
「あの子、看護士なのよ。…フランク先生って、あんたの主治医だっけ？」
うん、と私は答える。
「面白い偶然ね。」

＊

泊まっていったら？と言ったのに、あの子　―　ダイナちゃんは、ぼろぼろの彼女の服と私の古着を持って、
ぺこりと一礼して、どこかへ行ってしまったのだった。
風邪をひいてはいないだろうか。帰る家はあるのだろうか。もっと、してあげられる事があったんじゃないか。
…でも、過ぎた事を考えても仕方ない。とりあえず、出来る事をしなければ。家をキレイにしないと。
と、私はある事に気付いてしまった。家には、イスが二つしかない。

「良いんじゃない？立食パーティーって事で。」
サクラコさんと食材の買い出しに行っていたハンナさんは、大きく膨らんだ買い物袋を置いて、言った。
サクラコさんは、キモノのソデを紐　―　タスキというそうだ　―　でまとめあげていた。
左手首に、ハンナさんのしているのと同じ、手首飾りが見える。
彼女は、ふと私を見て、「ふふ、あっちゃん。」と、微笑んだ。
「さぁて、久々に腕を振るって料理が出来るなぁ。」

ハンナさんは、実に楽しそうに言った。私は、この間のアップルパイの味を思い出していた。
「何ヲ、作ルンデスカ？」私はうずうずして聞いた。
「そうだね…まずスパゲティをたくさん茹でて、ミートソースとか、バジルペースト、カレーとかをかけて食べるやつ。ソースはパンと合わせてもいいと思う。
それと、クリームコロッケ。スープは、シンプルに野菜のコンソメかな。」
聞いた事のない料理ばかり。私は、今まで何を食べて生きていたんだっけ？
「かーしゃトカ、ぼるしちトカハ？オ姉チャン、作レマスケド。」
「うぅん、俺はロシア料理はよく分からないんだ…それに、今日はイリスさんのパーティーなんだし。
あくまで、お客さんとして、ね？」
今度、作り方を教わるから。と、ハンナさんは付け足した。それにしても…
「何ダカ、ドキドキシマス。エト…家ニ人ガ集マッタ事、無カッタデスカラ。」
「本当に？一度も？」
「ハイ。デモ、コレデ、一度目デス。」
サクラコさんの居るキッチンから、バターの溶ける良い匂いがしてきた。

＊

「え、お酒？」
「そうよ。パーティーには、必要でしょ。」
「でも、私…」
「いーからいーから。こーいうときは、遠慮しないでおくものよ。どーせ金払うのはこいつだから。」

と、エドさんの頭を叩く。
「はぁ？…まぁ、いーけどさ。」チラと私を見る。
「で、何にする？」
そう言われても、私はお酒を飲んだ事が無い訳で、
「じゃあ、ウォトカ。」と、辛うじて知っているその名前を言う他無かった。
「ウォッカ？カクテルにでもするの？」スーは、ぽりぽりと顔を掻く。
「ううん、よく分からないけど、そのまま。」
二人とも、私の無知さに呆れた。
「ウォッカをストレートで…」
「ちょっとキツいんじゃないかしら…」

＊

「パーティーなんて、久しぶりだな。もう何年もやってないような感じがするよ。」
ギルは言った。そうだね、と僕は応えた。
「クレアは来ないのか？」アルが僕に聞く。
「クレアは、シェーラちゃんと一緒に来るってさ。今日は平日だし、大学だから。」
ふぅん、と二人は息をもらした。
「しかし、昔と変わって、5人で馬鹿やる事も無くなったなぁ。」
「どうした、今日は矢鱈とノスタルジックじゃないか。」
「そりゃ、俺は過去を引きずる男だからな。覚えてるか？俺の高校の時の彼女。ええと、何てったっけ…」
「サムでしょ。サマンサ・ジェーン・ロウ。」僕は言った。
「そう、そいつ。流石ヘンリー。優秀、優秀。お前成績良かったもんな。」
「お前と比べたら、大体の奴が良い成績になるな。」アルが茶々を

入れる。
「うっせぇなぁ…ま、いいや。でよ、アイツ、今でも忘れねェ、俺が警官になれたと言った途端に、
『警官は暴力するから、嫌いよ!』って、一方的に別れやがったんだ。短絡的にも、程があるだろ。」
「それで女に懲りない辺りがお前の駄目な所だよ、本当。」
「まぁな。でもまぁ、最近は彼女のカの字も無いけどな。
…あー、彼女欲しー。」
二人とも相変わらずだな、と僕は思った。

＊

「わー、すごいすごい。これ全部、ハンナが作ったの？」
えへん、とハンナは鼻を高くした。まぁ、サクラコも手伝ったんだろうけど。
薄い黄色のスパゲティが大きな皿に山盛りになっていて、トングが添えてある。
三つの深い皿にはそれぞれソースがたっぷり入っていて、近くにはたくさんのコロッケ、
そして鍋には、透き通った野菜のスープが湯気を立てていた。
「やー、ホセアさん、凄ぇスなァ。おらだばこっただの、絶対ェ作られね。」
ガチャリとドアが開く。お兄ちゃんと、ギルと、アルだ。久しぶりの、5人集合だ。
「いやー、凄いね。全部、ハンナちゃんが作ったの？」
「このパン、アルの所のか？」
「そうみたいだな。」
「てか今日、俺と櫻子で買いに行ったじゃん。」
相変わらずの調子の皆に、私は思わず微笑んだ。
と、再びドアが開く。今日の主役の、イリス・ソーンツェワさんだ。

ハンナから聞いてはいたけれど、アリスちゃんに似て、いやそれ以上の美人さんだ。
イリスさんともその友達と思われる褐色の肌の二人とも、色々お話したいな。
折角の巡り合わせなんだから。

＊

パーティーは始まって、食べてるのは大体が男性陣で、女性陣は細々と食べ物をつまみながら、
会話を楽しんでいると言ったふうだった。お腹がいっぱいになってくると、皆それぞれで騒ぎだした。
けれど、当初の目的である『イリスさんとギルをくっつける』というスザンナさんの目論見は、
なかなか達成されそうになかった。俺の見ている限りでは、イリスさんはかなりの奥手で、しかも鈍い。
ギルを意識しているのはバレバレだけど、あの４人の輪、ヘンリー、ギル、アル、そして看護士の、
俺もたまに病院で会って、面識のあるエド（でもどうして今日来たんだろう？）のグループにはなかなか入って行けない様子で、アリスちゃんやクレア、シェーラたちと話をしていた。
痺れを切らしたスザンナさんは、俺を外に一時引っ張りだして、櫻子にキッチンを預け、作戦会議を始めた。
「やっぱり、決め手はお酒じゃないかしら。」
「でも、イリスさんは飲みたくないみたいですよ。何でかは知りませんけど。」
事実、スザンナさんが買ってきたお酒を飲んでいるのは、大体が出会っていきなり意気投合している例の４人と、スザンナさん本人だった。
「ウォッカを水割で出せば、どうかしら？無色透明だし、気付かれ

にくいんじゃない？」
「うーん、そこまでするくらいなら、むしろもう強引に飲ませても大丈夫じゃないですかねぇ。」
　正直なところ俺は、スザンナさんみたいな年上の、大人の女性が、後輩であるイリスさんの幸せを願って奮闘しているのが微笑ましかったのだった。だから、俺もその手伝いをしてみたくなった訳だ。
「じゃあ、俺がギルに想いを寄せてる人の存在をほのめかします。スーさんはイリスさんを酔わせちゃって、良い気分にしてあげて下さい。」
オーケー、と俺たちは中に戻った。
すっかり出来あがっている４人の中に、俺は割って入った。
「何の話してんの？」

＊

　私は、アリスと、クレアさん、シェーラさんの４人で、ロシアやカナダ、スコットランドそれぞれの文化の話題で盛り上がっていた。といっても、私たち姉妹はロシアに住んでいたといっても、文化の事まで気にする生活の余裕は無かったので、逆にクレアさんのほうが妙に詳しかったりするのだった。
　と、スーが「ちょっと」と、私を呼んだ。端に連れて行かれる。
「どうしたの？」
「あんた、このパーティーの趣旨を分かってんの？」
「へ？皆でたくさん食べて話して、楽しかったねで終わりじゃないの？」
「違う。…まぁそれもあるけど。いい？ギルはねぇ、あんたの事が好きなのよ。
　お酒でも飲んで、ほろ酔い気分で陽気な気持ちでその勢いで…まぁいいや。」

どん、とウォトカの瓶と、グラスを二つテーブルに置く。
「つー訳で、あたしと一緒に飲みましょうね、イリス。」
ええ、と私は拒もうとしたけれど、結局は押し切られて飲む事になるだろうという事には、何となく感付いていた。

＊

酔っ払い４人の相手をしながら、上手くギルを引きぬこうとしていると、コンコンと扉がノックされる。
はい、と俺がドアを開ける。俺はあっと驚いた。フランク先生と、あの女の子だった。
「ドアの前に居たんだ。寒そうだから、中に入れてやれ。」
「あ、うん…」そう言うと、実感から嬉しさが込み上げてきた。
「来て、くれたんだ。」
「まぁな。禁煙か？」
「うん。小さい子も、居るから。」
「まぁ、そうだな。」
先生は余っていたグラスに適当な酒を注いで、エドたちの方に近付き、会話に参加する。
俺は、先生の隣に付いていた。
イリスさんはというと、スザンナさんと一緒にウォッカを…え、ストレートで？

＊

「オ姉チャン、オ酒飲ンデマス。」
アリスちゃんは少し不安そうに言った。
「イリスさんは、お酒飲まない人？」
「ハイ。ト、イウヨリ…」と、言葉に詰まったようで、ロシア語に切り替えて言う。

「父さんが、よくお酒を飲んでいて、私たち、嫌いだったんです。」
「それなのに…」
「でもほら、楽しそうよ？」私は、イリスさんを指して言った。
アリスちゃんは、少し淋しげな表情で、「ソウデスネ。」とだけ、言った。

＊

「ギルってホンット鈍いよね。」ようやくギルを集団から引き離して、俺は言った。
「は？」
「あ、やっぱり気付いてないんだ。近くに、あんなにギルの事好きな人が居るのに。」
「あ…？お前かぁ？」酔っぱらった時の惚けた表情で、言った。
「違うって。ギルにそんな感情がわくハズ無いでしょ。俺じゃなくて、もっと近くの、そう同じ職場の。」
「スー？」
「違う、違う。あーもう、何でそんなに外すかなぁ。鉄砲店の一人息子の癖に。」
「んだよ、お前、じゃあ一体誰だって言うんだよ。」
赤い顔を更に赤くして、怒るように聞いた。俺は、声をひそめて囁いた。
「イリスさん。」多分、にやけてたと思う。ギルは酔いが醒めたように、ぱちくりと俺を見た。
「イリスが？」辺りをキョロキョロと見回して、
「え、何で？」
「さぁ？直接本人に聞いてみたら？」俺は肩をすくめ、櫻子を手伝いに台所へ向かった。

＊

ハンナさんと話していたギルが急にこっちを向いたので、バチッと目があった。慌てて、目をそらす。
その先に、スーの目。
「ほら、いってきなさい。」ポンと、肩を叩かれる。
え、え、え、どうしよう。でも、ギルは近付いてくる。
幸いなことに、周りは騒がしい。ギルは、神妙な面持ちで私を見ている。
「…えと、」
何を、何を話せば良いのだろう。アルコールと恥ずかしさとで、胸は高鳴る。
顔が火照っていて熱い。
「…私、人を殺したの。」
全然違う事を口走ってしまった。
「ああ。見てたよ。あれは、仕方なかった。ああするしか…」
「ううん。ゴメン、違うの、私は、…」
言いたいのはその事じゃなくて、
「…はい。その、好き、です…。」
言っちゃった。
本当に？とギルに聞かれて、こくりと頷く。
不意に、彼の唇が私の唇に触れる。
え？と呆気にとられたが、それがギルの返事であって、
思えば、それが私のファーストキスだった。

＊

パーティーは、終わりに差しかかっているようだった。
皆は大体食べ終えて、ただ会話を楽しんでいる人がほとんどだった。
…ダイナちゃんは、今も食べているけれど。
「そろそろ、お開きにしようか。」と、サクラコさんたちと話をし

ていたハンナさんが言った。
「アリスちゃん。」と、私を呼んだ。
「ハイ？」突然に呼ばれて、私は戸惑った。何だろう。どうして、私なんだろう。
「締めに、ピアノ弾いてよ。皆の前で。」
「…ハイ？」私は目を大きくした。
「え、アリスちゃんば、ピアノっこ弾ぐんか？」「凄いわね」「ふぅん…」
「へぇ凄いなぁ。」「ほう。」「ピアノか。」「楽器弾けるのは、羨ましいな。」
「聞きたい、聞きたい。」「あっちゃん、すごーい！」「…」
と、皆口々に、そのような事を言った。
「エ、エ、待ッテ下サイ、ソンナ、私…」下手デスカラ、と言いかけて、遮るようにお姉ちゃんが言った。
「アリス。大丈夫。私が保証する。アリスのピアノは、凄く上手。」
続けてハンナさんも言う。
「そうだよアリスちゃん。俺もそう思うよ。自信を持って！」
皆の視線を一気に浴びる。私はどうしようもなく、リンゴのように赤く、小さくなって、
「ジャア、一曲ダケ…」
と、ピアノの前に座った。
　チラと、振り向く。しんとして衣擦れの音ひとつさえせず、皆が私に注目している。
覚悟を決め、すぅっと一息吸って、鍵盤に指を置く。
曲は、私の一番大好きな、ドビュッシーの『月の光』だ。

澄んだ月の光が、水面を淡く照らしている。
暗い森の中を、一羽の蝶がひらひらと飛んでいて、
その翅は月からの光素（エーテル）をいっぱいに吸収して、

より一層の透明さを増し、そして一輪の花にとまる。
花は楽しそうに風に揺れ、最後に大きくひと揺れしたとき、
蝶はどこかへ飛び去ってしまう。
蝶の残り香は、光素となって月の光に照らし出されている。

ぱちぱちぱち。と、誰かが拍手をする。続いて、また誰かが。
そして、とめどなく流れる雨のように、いつまでも鳴り続いていた。

「わぁ、綺麗。」クレアさんが、月の光が雪を照らしている様を見て、言った。
「おー、雪月…、日本の風情だなス。あとも一つ、花があればもっと良がんスけんど。」
シェーラさんが、続いて言う。その二人と共に、ヘンリーさんとアルさんも帰って行った。
スーさんとエドさんは、二人で並んで帰って行った。二人とも酷く酔っていたけれど、大丈夫だろうか。
フランク先生は、煙草を吸いながら帰って行った。
煙草の火が点いたり消えたりして、やがて見えなくなる。
お姉ちゃんとギルさんは、手をつないで行った。
「今日は、ギルの家に泊まるから…」と、言っていた。二人は、酷く遠くに見えた。
私は、いつまでもそれを眺めていた。
「アリスちゃん?」ドアの開く音がして、ハンナさんが話しかける。
中の様子がうかがえて、
サクラコさんはキッチンで後片付け、ダイナちゃんは眠ってしまったようだ。
「ハンナサン。」二人で、玄関の階段に腰掛ける。
「ピアノ。上手だったよ。」と、ハンナさんは笑った。そして、紅茶の入ったカップを、私に手渡す。

「アリガトウゴザイマス…。」私は、顔が赤くなるのを感じた。あんなに大勢の人に聞いてもらうのは、
初めての体験だった。凄く緊張したけれど、でも…
「楽しかった？」
「…ハイ。」私は、はにかんだ。私は紅茶を、ハンナさんはコーヒーを、一口飲む。
「ハンナサン。」
「ん？」
「オ姉チャンハ、恋人ガ…ギルサンガ、恋人ニナッタンデスカ？」
「多分ね。」
そう言って、月を見た。明るくて円いけれど、満月かは、分からない。
「…ナンダカ、オ姉チャンガ離レテ行ッチャウ感ジガシマス。」
「でも、元々人は、独りじゃないかな。だから、友達を作ったり、恋人を欲しがったり…」
「…デモ、淋シイデス。」
すると、ハンナさんは、私と肩を組んで言う。
「俺が居るじゃんか。」そして、ぽんぽんと二回、肩を叩く。
「…ハイ。」私は、嬉しさのあまり顔がにやけそうになるのを、堪えていた。
「ねぇ、知ってる？」
「何ヲデスカ？」
「月の光。月はね、太陽の光を受けて、光っているんだよ。星たちも、同じ。
昼間は太陽の強い光に負けてしまって、ほとんど見えないけれど、夜になれば、姿を現す。その実、つまり太陽も月も、同じ光だって事。」
と、ハンナさんは急に真顔になって言った。
「ええと…何が言いたかったんだっけ…そうつまり、太陽は月も、星も、地球も、

花も、犬も猫も、人間も照らしてくれるものなんだ。平等に、優しく、ね。」
私は勇気を出して言った。
「ハンナサンハ、私ノ太陽デス。」（YOU're MY SUNSHINE, HANNAH.）
そして、私とハンナさんは、一緒に笑った。
幸せって、こういう事を言うのだろうなと、私は思う。
月はじっとして動かずに、明るく澄んで、私たち二人、アリスとハンナを照らしていた。

＞i6818―830＜

Epilogue

「アリスちゃん、居る？」ハンナさんがガチャリとドアを開く。
私は一人で紅茶を飲んでいて、椅子に座ったまま、ハンナさんの方を向く。
「ハイ。大抵ハ居マス。」と、答える。あまり外には出ないから。
でも外は晴れていて、窓からは花のつぼみがあちこちに見える。
「…あれ？日曜なのに、イリスさん居ないんだ？」
「ハイ。エト…最近ハヨク、ギルサンノ家ニ泊マッテルンデス。」
ハンナさんはにやりとして、
「うへへ。お熱いこって。」と言った。
私は意味を掴めず、眉を寄せて聞いた。
「アノ、私ヨク分カラナインデスケレド、恋人同士デ、家デ、何ヲスルンデスカ？
エット、オ食事トカ、デスカ？」
ハンナさんはお姉ちゃんの椅子に座って、
「アリスちゃんはまだ知らなくて良いんだよ」と、言った。
私は疑問符が残ったままだったけれど、答えてくれそうもないので、
「こーひー、飲ミマスカ？」と、聞いた。

＊

「処でアリスちゃん。」お茶をしながら、俺は切り出す。
「何デスカ？」ぴたっと動きを止めて、俺を見る。
「どっか大きい所で、ピアノ弾いてみる気は無い？例えば、学校とか、教会とか。」
すると戸惑ったように、というよりいつもの調子で、
「エ、エ、ソンナ、無理デス、出来マセン！」
と、言った。俺は構わず続ける。
「いや、実はね。今度近くで、ピアノの発表会みたいなのがあるんだって。
それにアリスちゃんも参加したら良いんじゃないかな、て。」
「デモ…」ともじもじしているアリスちゃんに、酷ではあるけれど告げなくてはいけなかった。
「というかね、もう応募しちゃったんだ。その、コンクール。」
…ハイ？と、今までに無いくらいの大きな目で、俺を見た。

「駄目デス駄目デスハンナサン、今度バカリハ絶対ニ駄目デスッ。」
当日の朝、アリスちゃんはそんな事ばかり言っていた。
「大丈夫だよ、自信を持って！アリスちゃんは、うまい。上手。さん、はいっ。」
ウマイ…ジョズ…ダイジョブ…と、繰り返し呟いていた。
そういえば、クレアにもよくそんな事を言われた。大丈夫だって、きっと何とかなる。

自殺しようと手首を切り、失血で入院した後、俺はほとんど、抜け殻だった。
フランク先生から聞いたところによると、
「父さんには、言わないで下さい、心配させたら、駄目なんです。」

の、繰り返しだったそうだ。単身赴任の父さんに心配をさせたくなかったためとはいえ、
確かにあの頃はどうかしてたと思う。
面会が出来る状態になって、真っ先にやって来たのはクレアだった。
クレアが本気で怒ったのを見たのはあの時が最初で最後、今でもはっきり覚えている。
今まで見た事も無い険しい表情で、ずんずんと近付いて来て、そしてぶたれた。
「馬鹿ッ！どれだけ、私がどれだけ心配したと思ってんの！？」
と、クレアの目から涙がこぼれた。そして、子供みたいにわんわん泣き出して、俺に泣きついた。
俺はゴメンとだけ呟いて、クレアは馬鹿馬鹿、生きてて、本当に良かったと何度も繰り返して、
結局二人で泣いた。傷跡に涙が染みた。俺が立ち直るには、ほとんどそれで充分だった。

「あ、ほら、着いたよ。」
「あう…。」ついに観念したようだった。
クレアとシェーラには、アリスちゃんが出ると事前に伝えておいたので、二人はこっちに向けて手を振った。
「アリスちゃん、頑張ってね！」
「んだ。心配スンナ、んがなら大丈夫だへぇで。」
俺はただ、アリスちゃんの肩をぽんと叩いた。

＊

リハーサルがあって、本当に良かった。初めは緊張していたけれど、ピアノを弾いているうちに、
だんだんと落ち着いてきた。よくよく考えてみれば、私は昔からそうだった。辛い状況から逃れる為に、

ピアノを逃避の手段として用いていたに過ぎない。だから、特にそれが上手いとは、思えない。
『アリス。大丈夫。私が保証する。アリスのピアノは、凄く上手。』
不意に、お姉ちゃんの言葉が思い出された。
あたたかくて、おおきくて、やさしいお姉ちゃん。
母さんの腕で抱かれた事の無い私にとっては、お姉ちゃんがお母さんだった。
前に母さんの事について、聞いてみた事がある。
『母さんはね、ピアノが上手で、料理も上手。人に尽くすのが好きで、家事とかも嫌がらずにやってた。
見た目？写真、見た事無いっけ？…ええっとねぇ、私みたいな髪の色で、ロングで、前を切りそろえてる。
カチューシャをよく着けてたなぁ。大きな栗目をしていて、…うん、似てる。アリスに似てる。』
私に似ていると言う事はお姉ちゃんにも似ていると言う事だけれど、お姉ちゃんは私に似ている、と言った。
私が母さんと似ているなら、どうして父さんは私を、母さんと同じようには愛してくれなかったのだろう。
「アリス・ソーンツェワさん。付いて来て下さい。舞台袖に移動します。」

袖からは、大勢の客と、たった一人のピアニストとが覗いて見えた。
まず一礼して、ピアノの隣に座り、演奏を始める。
やはり、私より上手だと思う。けれど、この人は、誰の為にピアノを弾いているのだろう。或いは、何の為に。
コンクールで良い成績を取りたいから？ただ単に、ピアノを聞いて欲しいだけ？
親や先生に、良いところを見せたいから？表情は険しくて、たぶん、私よりも緊張している。

私は、いつも通りに、と思った。何の為と言う訳でなく、今までのように、自分の為に。
そして、聞いてくれる全ての人の為に。
演奏が終わり、一礼し、拍手が起きる。彼は満足したように、ステージを去る。
私はピアノへと向かいながら、チラと観客席の方を盗み見する。
ハンナさん、クレアさん、シェーラさんが並んで座っていて、
ハンナさんは私を見て微笑んで、小さく手を振ってくれる。
私はぎゅっと手を握り締め、唇を固く結び、一礼する。小さく拍手が起きて、ピアノの前に座る。
そして、アナウンスが流れる。
「０９５番、アリス・ソーンツェワ。ドビュッシー作曲、『月の光』。」

（終）

12話とエピローグ（後書き）

これは名無し（私）の処女小説であったゆえに至らない部分（視点がコロコロ変わったりキャラが多くまた描きたいことが多かったりして上手く纏まっていないなど）も多々あるのですが、最後まで読んでいただいたり、目を通されたり、いえむしろ最早ページを開いて頂いただけでも感謝感激雨霰で御座ります。有難ふ御座います。ナマステ。

追伸：後々、新規で読みやすく分かりやすく書き直したいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4208j/

アリスとハンナ

2010年10月11日12時26分発行